

NHK学園生涯学習フェスティバル

月山俳句大会

令和元年十月二十三日（水）午後一時～四時

西川交流センター「あいべ」大ホール（山形県西川町）

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園通信講座センター長

中本 敦

西川町長

小川 一博

一、選者紹介

一、講演「月山と芭蕉」

―休憩―

宮坂 静生

第二部

一、表彰

一、選評

「きたごち」

柏原 眠雨

NHK学園俳句講座講師・「小熊座」

津高里永子

「玉藻」

星野 高士

NHK学園俳句倶楽部選者・「岳」

宮坂 静生

（五十音順）

一、当日句「月山の秋を詠む」入選発表

阿部月山子・工藤 稲邨

庄司りつこ・鈴木 正子

総合同会 フリーキャスター

北林きく子

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 月山俳句大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきました。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「信」あわせて三千八百七十一句にのびりました。出羽三山が古より信仰をあつめてきたことから題を「信」といたしました。多くの素晴らしい作品が集まりました。お寄せいただいた俳句の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてくれます。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、俳句を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十六年に開設された俳句講座は、これまでの三十八年間に、五十六万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や俳句学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投句いただいた皆様、ご協力をいただいた山形県・西川町ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年十月二十三日

い あ い さ つ

山形県西川町長 小川 一博

古来から、〳西のお伊勢参りと東の奥参り〴〵と言われ、東の奥参りは出羽三山へのお参りを表しますが、出羽三山への登拜口七口のうち三口がある西川町には、全国から多くの参詣客が訪れました。羽黒山は現世の幸せを祈る山（現在）、月山は死後の安楽と往生を祈る山（過去）、湯殿山は生まれかわりを祈る山（未来）と見立てられ、三山を巡ることは【生まれかわりの旅】と言われ、この理念が平成二十八年四月に日本遺産と認定されました。

この理念は、豊かな自然や文化に触れ、感動や心の在り様を読み、生活の質を高めていく俳句づくりの世界と相通するものがあり、出羽三山の御膝元のこの町で、山岳信仰にちなんだ「信」を題詠として本大会が開催されますことは、現代社会においても大変意義深いことであると思えます。

本大会でご講演をいただく宮坂先生をはじめ選者の先生方、ご投句、ご参加下さった皆様並びにご後援、ご支援、ご協力賜りました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

令和元年十月二十三日

選者紹介

講演・選者



宮坂 静生（みやさか しずお）「岳」主宰
昭和十二年長野県生れ。富安風生・藤田湘子に師事。昭和五十三年「岳」創刊、主宰。現代俳句協会特別顧問。第四十五回現代俳句協会賞受賞。著書『俳句からだ感覚』（第一回山本健吉文学賞）『語りかける季語ゆるやかな日本』（第五十八回読売文学賞受賞）『季語体系の背景―地貌季語探訪』、句集『雛土蔵』（第十一回俳句四季大賞）『噴井』など。

ただちや豆とて庄内の空邃し

選者



柏原 眠雨（かしわばら みんう）「きたごち」主宰
昭和十年東京都生れ。昭和二十五年「青蝶」に入会、神葱雨に師事。昭和五十四年「風」に入会、沢木欣一に師事。俳人協会顧問。平成二十七年俳人協会賞受賞。句集に『炎天』『草清水』『露葎』『夕雲雀』など。

二階より運動会の端見ゆる



津高 里永子（つたか りえこ）「小熊座」同人「すめらぎ」代表 NHK学園俳句講座講師
昭和三十一年兵庫県生れ。「未来図」を経て「小熊座」入会、佐藤鬼房に師事。現代俳句協会出版部長。句集『地球の日』、著書『俳句の気持』など。

まちがひのもとと綿虫に日が差して



星野 高士（ほしの たかし）「玉藻」主宰
昭和二十七年神奈川県生れ。祖母星野立子に師事し、十代より作句。「ホトトギス」同人。鎌倉虚子立子記念館館長、日本伝統俳句協会会員、日本文藝家協会会員、国際俳句交流協会理事、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会理事。句集『破魔矢』『谷戸』『無尽蔵』『顔』『残響』、著書『星野立子』『俳句創作百科 美・色・香』『俳句真髓』、共著『立子俳句365日』など。

松茸や虚子の名付けし酒二つ

当日句選者



阿部 月山（あべ がっさんし）「春耕（しゅんこう）」同人、「万象（ばんしょう）」同人、「月山（がっさん）」主宰
昭和十六年山形県生れ。昭和四十五年「風」入会。沢木欣一に師事。公益社団法人俳人協会評議員、山形県俳人協会顧問。昭和五十六年「春耕」同人。昭和五十八年「風」同人。平成十四年「万象」同人、「月山」創刊主宰。サンケイ全国俳句大会文部大臣賞、高山樗牛賞、斎藤茂吉文化賞受賞。句集「月の山」、「湯殿嶺」。

月山を指呼に車座芋煮会



工藤 稲邨（くどう とうそん）「波（なみ）」同人 西川町せせらぎ俳句会会長
昭和十四年山形県生れ。平成元年西川町せせらぎ俳句会入会。山形県俳人協会常任幹事。

月山の紅葉句へる一日かな



庄司 りつこ（しょうじ りつこ）「阿以（あい）」主宰、「波（なみ）」同人
昭和二年徳島県生れ。昭和五十一年「馬酔木」入会、水原秋櫻子に師事。昭和五十九年「阿以の会」発足、昭和六十二年「阿以」創刊主宰。平成十一年「馬酔木」退会。倉橋羊村に師事、「波」同人。山形県俳人協会名誉会員。句集『蔵王日和』『出羽山河』。

献体に学生の謝辞秋澄めり



鈴木 正子（すずき まさこ）「胡桃（くるみ）」主宰、「初蝶（はつちょう）」同人
昭和十六年山形県生れ。昭和六十三年「初蝶」、「胡桃」入会。小笠原和男に師事。公益社団法人俳人協会山形県支部長。句集『有心』『粉雪』。

朴落葉しばらくは日に乗せてをり

NHK学園月山俳句大会大賞

半夏雨防災食を食べてをり

神奈川県 田中洋子

月山を仰ぎて実る稲穂かな

兵庫県 大上修美

△題詠「信」▽

登山帽脱いで信徒の貌となる

山形県 板坂歩牛

西川町長賞

月山や金剛杖に秋の風

山形県 笹原 茂

西川町教育委員会賞

自動ドア開き退院若葉風

静岡県 鈴木よし

月山朝日観光協会賞

夏の月芭蕉は旅の途上なり

神奈川県 川村五子

NHK山形放送局長賞

登るほどひれ伏す青葉青葉冷

岩手県 阿部 靖

柏原 眠雨 選

特選

不器用な子の千羽鶴夏旺ん 三重 箱林 允子

何のための千羽鶴かは言及されていないものの、何かの祈願を籠めてのものであることは確か。上手に折れなくても、願いを托してたくさん鶴を一生懸命に折っている子が健気でいじらしい。八月は原爆忌や七夕や高校野球など行事が多い。それに向けて盛夏に汗をかいているのだ。

自動ドア開き退院若葉風 静岡 鈴木 よし

入院生活から開放されていよいよ退院である。病院の玄関を出る際に、ドアが自動で開いた。両手に荷物を抱えているので助かったと同時に、早期の退院を促されたような複雑な気持ちもなった。そんなユーモアを孕みながらも、めでたい退院である。外はもう夏で若葉風が清々しい。

……題詠「信」……

廃仏を逃れ開帳朴の花 石川 宮崎 尚範

普段は秘仏の厨子が開かれて拝観のできる開帳は、春の季語になっているが、この寺では夏の始めにご開帳が行われているのだ。その秘仏は、明治初年の廃仏毀釈の手を逃れて今日に至ったもの。それだけに余計にありがたく思われる。寺の庭に開いた白い朴の大輪が仏を讃えている。

秀作

保護者にも渾名で呼ばれ新教師
 嬰兒のふぐりまでうつ天花粉
 無愛想な面売りのゐる地藏盆
 日めくりは昨日の日付種物屋
 肘あげて髪結ふ少女雲の峰
 父の日や胎児の話まだ秘密
 アンパンマン胸一杯に毛糸編む
 炎天へまつさらの傘広げたり
 闘牛の果てれば群れ来村雀
 雪原に汽笛流るる帰郷かな
 散村を水面がつなぐ植田かな
 大瑠璃のこゑ衍せる五大堂
 市跡の菜屑に残る今朝の霜
 回覧板金魚がいつも玄関に
 頂上の祠小さし霧襖
 積めるだけ積みて戻りぬ昆布舟
 月蝕に照明を消すビヤガーデン
 盆栽の蜘蛛の囀光る雨雫
 溪流を跨ぐ倒木風薫る
 運転手の指呼白鷺の舞ふ空に

北海道 藤林 正則
 山口 林 勇二
 埼玉 岩本 弘
 埼玉 高田みづ紀
 大阪 永田 若菜
 香川 塚原味紀枝
 愛媛 池田タマキ
 千葉 崎谷 弘子
 新潟 佐藤 無風
 東京 若林 正人
 愛知 安藤 汀
 埼玉 松枝 松風
 長野 百瀬 信之
 石川 榎本 俊明
 神奈川 佐藤 美保
 愛知 中本きみよ
 大阪 福士 重子
 山形 青山 君代
 東京 井上 千秋
 宮城 屋代ひろ子

コスモスや巢立ちし子より第二信
 信望 愛校訓胸に卒業す
 返信はハートのマーク星まつり
 結願をかなへ自祝の温め酒
 胸厚き行者の弾く滝飛沫

ボステア
 ヘルネツギ
 神奈川 上原百合子
 埼玉 吉居 珪子
 福岡 渡辺 倫子
 宮城 西山 勝男
 富田 洋子

……題詠「信」……

佳作

掲載は氏名五十音順です。

登山道弥陀ヶ原にて雲の中	青木 孝	鉄棒の着地ぴたりと夏に入る	伊藤 竹代	法螺貝の木霊の返る山開き	岡田 邦男
蛸や横広がりの帰り道	赤羽 克己	理学部の煉瓦のアーチ青葉光	伊藤 哲	日本海を押しして出水の最上川	岡田 邦男
蛸や薪風呂沸かす火吹竹	赤羽 克己	山霧が池塘を走る弥陀ヶ原	猪股とみを	病室が特等席や揚花火	岡田 邦男
十二月八日茶房にピカソの絵	麻生 勝行	手をつなぎぐるる茅の輪の香りかな	岩井 青岳	稲妻や剝落しるき飢渴の碑	岡本 幸治
独り居の庭に泰山木の花	渥美 英雄	春蟬の足元で鳴く出羽の山	岩崎 昌子	ハモニカの音真ん中に芋煮会	岡本 幸治
S Lの煤の匂ひや梅雨曇	渥美 英雄	朝顔をほめて一日始まりぬ	岩本 弘	蔦青葉覆う茶房に夢二の絵	岡本 幸治
月山の筍飯や坊泊り	阿部清流子	修験者の霧より現れて霧に消ゆ	岩谷 塵外	山内の句碑に寄り添ふ四葩かな	小川美津子
月山の峰より湧きし群蜻蛉	安部 衣世	大寒の曲がる背筋を伸ばしけり	植木 英雄	公園の砂場雲梯五月雨るる	小川美津子
蔵元に百年の井戸しゃがの花	あまの樹懶	お花畑雲わきあがる空の青	植木 裕美	春潮や島に昭和のシネマ館	沖 純次
修験者の白装束や涼新た	荒井 千枝	山寺のひと間に雑魚寝明易し	上村 佳与	名を決めて産声を待つ月涼し	奥村 利夫
教室に一匹の亀夏休み	荒井ハルエ	蓮棚田親子の水に映りゆく	内田 寿子	流灯会終へて渚に波の音	奥村真由美
紺青の空より滝の溢れ落つ	荒木 信夫	月山の水掛けて終ふ種卸	及川奈奈夫	百尺の滝滝壺の水を打つ	小澤 藍加
土砂降りのシャッター街や額の花	有澤 嘉晃	雲の峰 鳥海山の鎖網	大江 洋子	小面の長押に微笑藤の花	小田 金幸
声だけが先に届きし濃霧かな	池田 純子	ぐい呑みのゆがみを褒めて新走	大川 千草	飛び散るや波のかたちの夜光虫	小野 薫
救急車去りまた村は春の昼	石川 明	修験者の白足袋追ひし山開き	大玉 雅之	出航の汽笛の届く蜜柑山	垣内 重行
野球部はみんな丸刈り鯛雲	石原 良彦	リュックにもお神酒湿らせ山開き	大玉 雅之	妹逝けり泰山木の白々と	鹿見嶋栄子
うすまりしアイスコーヒー商談中	板坂 歩牛	閉店は日暮と貼つて釣忍	大塚とも子	四連隊跡に少女の像涼し	柏木ともみ
水色の移動図書館天高し	市丸万由美	田植して議場へ急ぐ主婦議員	大野 兼司	緑蔭や野点の席の江戸切子	春日 良江
山伏と護摩火を渡る星月夜	伊藤 厚子	首ふれば軋む昭和の扇風機	岡 白雲	お花畑偽山頂を二つ越ゆ	狩野 花朶
イザベルとトムと呼び合ふ浴衣かな	伊藤 石英	月山に四つん這いして蕨狩り	岡崎 陽子	爺杉の四手の白さや初日さす	神根 信

寺町を黒き猫ゆく薄暑かな	川崎 和啓	箱舟の傾ぎを深く蓴採る	幸野 峰	夫残す庭の木々にも夏の月	佐藤 敬子
夏蝶や海に向きたる乳母車	川崎 和啓	ヒロシマのデルタに燃えて夾竹桃	小柴 智子	朝涼し魚網繕ふ大胡座	佐藤さき子
ゆつくりと母の歩幅やおぼろ月	河田 公枝	大仏の背中が淋し蟬時雨	児玉 君子	月山のはんざき躡る地塘かな	佐藤 隆
岩魚焼く峡の旅籠の釣談議	川村 丈夫	月山を仰ぐ暮らしや豊の秋	きむらあきの	羽黒路の雨音やはし桐の花	佐藤 千枝
八月や錆びし鉄帽掛かりをり	神田すすむ	名水の育てし郷の稲を刈る	こづかあきの	月山も鳥海も見え春隣	佐藤 豊光
撫子や盛り土だけの遊女墓	岸下 庄二	粽結ふ紐の片方きつく噛み	後藤 貞義	仰向けに雲の流れを見て泳ぐ	佐藤風信子
饒舌も妻に似てきし帰省の子	木嶋 政治	百円を缶に落してトマト買ふ	木幡 嘉子	なまこ壁の店蔵に風夏暖簾	佐藤ひろ子
笛の音に暮れゆく空や薪能	木嶋 政治	果樹園の動き出したる芽吹きかな	小林 美峰	民宿の五右衛門風呂や冬銀河	佐藤 正博
雨兆す女人高野の木下闇	岸本 悦子	後ろ手に句帳を持ちて青田道	小松 温美	取っ付きに新玉葱や朝の市	佐野 明美
アルプスに片脚かけて虹立ちぬ	木下 涼薫	梅雨はげし塔中煙る瑠璃光寺	小松 弘佳	夏見舞青墨にじむ手漉き箋	佐野 明美
月山の池塘を渡る春の雲	木原 登	滝しぶき横切りゆきぬ鳥一羽	五味 久子	見はるかす多摩の流れや麦の秋	佐野 通夫
どくだみの花差してある喫茶店	木村 典子	十五夜や胎児に語る月旅行	小屋 幸保	薔薇園や大輪に咲く女優の名	塩野 恒子
尻尾なき蜥蜴三和土を過りけり	草野 准子	月山も鳥海山も青田中	今田 妙子	青田風親子二人の散歩道	志手 睦男
廃校の校歌の杏熟しけり	楠 暢太	涼しげに咲いて桔梗の濃むらさき	齋藤キミ子	隣との狭きあはひを秋の風	芝田 太
窓開けて座敷に通す青田風	工藤ひろし	聴聞の翁の腰の団扇かな	齊藤 邦枝	腕力も弱り大根おろすなり	芝田 太
雪溪にリフト終便ひびきけり	熊沢れい子	双眼鏡に月山合わす夏休み	酒井 憲子	里若葉干し物多き駐在所	島津紀代子
上海のビルの林立チューリップ	倉増 みよ	落し文駆込寺の勝手口	佐久間清観	みしみしときしむ廊下や卒業す	島津 義浩
夏スキー万年雪を削りけり	栗原ただし	笹餅の湯気立つ厨半夏生	佐々木勝子	オルゴール終の一打や春炬燵	島津 義浩
鳥海山ゆらして田植始まりぬ	栗山よし子	月山の風切る少女夏スキー	佐々木次雄	三代代弁当囲む運動会	清水 清伺
月山のよく見ゆる日や水落す	栗山よし子	霧ぶすま白装束と鈴の音と	笹原 茂	月光や雁を渡せる月の山	志村 美好
祭笛聞きつつ急ぐ厨事	源通ゆきみ	朗朗と禰宜の祝詞の山開き	佐藤 栄子	月山の峰まるやかに粧へり	杉山みどり
湧き水に浮かぶトマトや峠茶屋	源通ゆきみ	記念日をみちのくへ旅薄紅葉	佐藤 和成	奥山の駅に人無し月見草	鈴木 木香

鉄砲を持つは女よ菊人形	鈴木 正子	流れ来て霧の遮るケルンかな	田嶋由美子	えごの花ゆるき靴紐しめ直す	西村 久子
嬰兒の声漲るや竹の春	鈴木 素子	半夏雨防災食を食べてをり	田中 洋子	伊吹より秋の風来る蛤塚忌	西本 文子
神前に向かふ二人に若葉風	砂押 悦子	旅なかば朝顔市をひやかしぬ	種元弘一郎	万緑や御堂に並ぶ古き絵馬	日塔 貞子
島駆ける鉄人レース百合の花	砂川 節子	旅の夜の湯宿に啜る走り蕎麦	千田真理子	遠雷に腕組を解く老庭師	二藤 覺
うづくまり寄り添ふ鳩や梅雨深し	角 雅行	托鉢僧の鉄鉢濡るる秋の雨	千原 道子	殉教の島黒々と五月雨るる	萩原 豊彦
船音の浦曲に訝明急ぐ	角 雅行	アルプスの花見し靴や黴臭ふ	土屋 通子	高原の畳の教会百合香る	橋爪 洋子
涼しさや仏間の窓の遠月山	清野佐知子	津波禍の海の碧さよ虹立ちぬ	露木 伸作	読み止しの旅案内や朧の夜	長谷川菊男
夕虹や鼻の欠けたる磨崖仏	関 美奈子	新緑や朝日さし込む五合庵	露木 伸作	遺影にもただいまと言ふ夏のれん	馬場 馬子
緑陰やドアに鈴鳴るピザの店	関森田鶴子	落雷や老杉一樹火柱に	鶴田 幸男	着ぶくれて死に方論ず朝のバス	濱田真知子
蔓薔薇の一本屋根を突きにけり	高倉 早苗	白南風や越後三山雲二つ	戸田 敬身	凧の夜は父の文母の文	原田 咲子
山小屋の短き夜の雑魚寝かな	高杉 光昭	廃屋の庭離れざる秋の蝶	外村 吉淳	かなかなや即身仏の村閑か	原田 耕雲
蔓からむ葉蔭で太る胡瓜かな	高橋 睦子	メモ帳を花の名で埋め峰涼し	永井かずほ	月山や海よりはしる時雨雲	阪東 静子
かなかなや茅葺き屋根の大神	高橋 裕子	田水張る輪中の村の水あかり	永田 満男	単線のホーム短き青田風	馬場 弘子
朝霧の羽黒の法螺や山動く	高橋みつを	黴の香の古本漁る太宰の忌	中根 武郎	火渡りの熾あかあかと望の月	肱元 燈穂
夕映えの月山仰ぎ草を刈る	高畑 半身	母衣蚊帳や傘寿の母の小さき足	中村みちよ	大寺の小暗き厨夜の秋	志鎌恵美子
枝先の雪の落ちたり紅椿	高松 秀夫	町長に合はす拍手海開	中本きみよ	御旅所の神事の太鼓鳴り始む	平井小枝子
夕立の止みて再び草野球	田上 喜和	願掛の置石つなぐ蜘蛛の糸	中山 幸子	兜太の句の極太の書の団扇かな	平林 佳治
月山を映して今朝の青田かな	田口 穂心	新樹光指で確かむ赤子の歯	名越 紫音	雨模様鉢の露草真青なる	深津 敬子
月山の山塊黒く十三夜	武井 猛	青田道ハザードつけて話し込む	鳴滝 暁	足もとに空を広げて植田風	深谷 泰子
新米で快気祝を送りたる	武井 猛	草の家の祝賀に満ちて小鳥来る	西久保キクノ	梅雨寒や峡の底ひに牛が啼く	福井 英敏
出迎への鸚鵡と会話梅雨の宿	竹下 正子	針祭年の数程納めけり	西久保キクノ	自転車の膝で風切る日焼の子	藤岡 定子
夜店出し帰路はラジオの深夜便	武田 本子	境内を巡る小流れ著莪の花	西村 斗潮	連山を映す植田の水平ら	藤墳 博明

母校いま老人施設十三夜	藤林 正則	踏切の長き警報夏炎ゆる	村橋 克雄	大橋の向ひ擬宝珠霧の中	渡辺 尚武
鳩の子の溺れさうなる青嵐	藤原 和子	カヌー競ふ峡の急流花あふち	村橋 克雄	……………題詠「信」……………	
能登島に春灯一つ又一つ	渕野 栄子	山畑に鉄打つひとり秋の空	村橋 克雄	本宮へ雲海攀る信徒連	青木 孝
隣村と水の繋がる天の川	細野やすい	飛び石は水琴窟へ梅雨しぐれ	室 千寿子	この先は神の領域山滴る	阿部 靖
五月田や田毎に抱く倉の影	堀毛美代子	語り部の民話の景色炬火に浮く	持田 市朗	通信簿手渡し夏が動き出す	有澤 嘉晃
敗戦のスコア消し去る白雨かな	前 九疑	舟遊び螢火殖えてゆく背山	森 山帽子	信号右折烏賊干す郷の訛声	伊藤 米子
若葉から若葉へつなぐ歩道橋	松浦知恵子	校歌の碑残し夏草刈られけり	屋代ひろ子	月山の水の育む花野かな	井上 昌子
小鳥来る京和菓子屋の窓	松浦美智子	雷鳴に負けぬ相づち雨宿り	柳澤 友香	西日中待つ信号の赤長き	遠藤 操
化粧して花菜明りに道祖神	松下 乃湖	まだ白き月山拜す春炬燵	山口 雄二	寺古りて百の仏に蟬しぐれ	大江 洋子
コーヒーに広がるミルク若葉風	松永 圭子	笹の葉に今羽化したる揚羽かな	山崎 妙子	残雪や信濃の里の湯の煙	大平 政弘
ひとつ落ちふたつ落ちて柿の花	右田 捷明	シヨートステイに出して蛙の目借時	ひーちゃん	返信はただの了解ソーダ水	奥村 幸恵
銀輪の前後に嬰や桃の花	三津木俊幸	こいのぼり水田の上にゆらぎをり	山野 節子	法螺の音や信者の踏める雪溪路	小野 誠一
蜜豆を襦袢の母と共に食ぶ	箕輪 京子	桐咲いて風やはらかき奥会津	山本 久枝	母の日や母の好みの信玄餅	金子日出子
バス停の朝のあいさつ赤蜻蛉	三原 利子	幣帛の新米香る合祭殿	結城トミ子	産土神の茅の輪をくぐる曇空	上内 義則
更衣かすかな香り身に纏ふ	三保 清喜	整いて早や早乙女を待つばかり	行藤	大試験父は無言で送り出す	川崎 和子
天瓜粉生まれて六ヶ月の四肢	宮内 信子	浮苗をなほす女人の笠ゆるる	湯田 暁道	結界の鳥居を潜る登山道	岸下 庄二
片目なき即身仏や蟬の声	宮岡 章子	大漢和辞典の並ぶ部屋涼し	湯本三千代	不信心なれど祠の落葉掃く	久保 厚夫
朝靄の晴れて涌き立つ雲の峰	宮川 雅子	梅雨晴間新人達の音合わせ	横山はるみ	雪嶺の月山下る修行僧	栗山よし子
薬売り新米二合提げて来し	宮崎 尚範	吉野山静かに余花の終りけり	吉原 誠之	煤払ふ信徒に配る焼きむすび	栗山よし子
地図片手に百舌古墳群夏つばめ	向井 昭子	てふてふやむかし気質の宮大工	吉松 武司	病得てよりの仏心月涼し	桑原 淑子
仔牛来る厩舎へ敷きぬ今年藁	武藤 邦昭	祖谷溪の昏き岨道余花の冷え	吉本隆太郎	月山を仰ぐバス停つばくらめ	小泉 染生
六道の辻へ消えたる白日傘	村田 浩	秋草の生ふるままなる内裏跡	吉本隆太郎	月山や賽の河原の霧登る	小玉 洋一

雪解野を左右に分かち信濃川	小林 七重	泉にも滝にも社出羽の国	野中 定代	蒼天を囲む信濃の青嶺かな	山岸 嘉春
遠ざかる昭和を招く門火かな	小松 一郎	信仰の島の天草落椿	濱田 朋子	峰雲や信者の鳴らす杖の鈴	湯浅 康右
修験者の草鞋新や登山口	斉藤 隆夫	回覧板路地の祠の草むしり	林 達夫	女人らの和讃玲瓏沙羅の花	湯田 畊道
戦なき国と信じて泥鰯汁	佐野 明美	信濃路の修学旅行霧の中	福田 尚義	夏霞帰山の僧の消えゆけり	吉井美代子
信濃川うだる暑さを流しけり	重富美津恵	信号を待つ間に消ゆる秋の虹	藤岡 定子	大岩の不動が睨む春驟雨	吉田 徹
信徒らの杖の上なる星月夜	清水 勝子	地藏会の信心ひとつ鶴を折る	藤田美和子	海鳴りの窓に地球儀風信子	若林 正人
返信の婚の受諾や風薫る	菅谷 貞夫	月山に深く一礼帰省の子	藤林 正則	田仕舞の終りてのちの善光寺	和田 郁江
遠蛙今日より次の経を読む	鈴木 実	信仰の御山を照らす今日の月	藤平嘉兵衛		
廃村に野仏祈る草いきれ	清野 幸夫	信号待ちのその足もとに日雀かな	堀毛美代子		
母の日や信濃の娘からお六櫛	関口 昌弘	水口に御札たておく青田かな	堀野カツ子		
大年や兄の遺作のほとけ拭く	高木ヤエ子	効くといふ言葉信じて土用灸	増田 信雄		
あれきりの音信二人葱の花	竹田しのぶ	クリスマスサンタ信じし子の寝息	益田満寿美		
月山に祈りて下る雲の峰	田野咲美子	未だ継ぐ隠れ信仰島の春	松尾 雄司		
稲妻や喪に急ぐ夜の佐渡航路	土屋 通子	信濃路へ藤村の本ふところに	松岡たけを		
月山を拝し始動の稲刈り機	霧野萬地郎	大臣の所信表明街新樹	松岡たけを		
かの美女の落第をみな信じざり	中川 計介	バスの旅また渡りたる信濃川	萬年 和子		
信樂の狸置かるる夏座敷	中澤 草子	信濃川瀬音にまじる風の韻	三原 利子		
返信は忘れたころに麦の秋	永田 若菜	杖を置き信者ら憩ふ夏木立	宮岡 章子		
父と子の手旗信号風光る	中根 武郎	蕎麦の花信濃古道の道祖神	村田 浩		
信号を待つ間の手話を見て居りぬ	中村 一子	阿弥陀吐く空也に逢うて迎鐘	村田 浩		
影伸ぶる電信柱暮早し	中山 幸子	自信作てふ白桃を求めけり	村橋 克雄		
傘立ては信樂焼や走り梅雨	能田 孝昌	出席の返信はがき春きざす	目黒 輝美		

津高里永子 選

特選

半夏雨防災食を食べてをり 神奈川 田中 洋子

災害に備えた保存用のものにも賞味期限はある。少々期限が過ぎていた缶詰なども、たとえ、風味が落ちていたとしても捨てずに食べるのが仁義である作者の年代。外は梅雨明け近い雨がかなり激しく降っている。ここ数年のとりあえずの無事を思いながら、昨日まで保存食であったものに箸をつける。

夏の月芭蕉は旅の途上なり 神奈川 川村 五子

芭蕉が亡くなる四日前に詠まれた（旅に病んで夢は枯野を駆け廻る）の句に「病中吟」と前書があるのは、まだ旅を続けることに意欲があり辞世の句と思われなくなかったという心境であったからではないかという。月への思いが一入だった芭蕉。よくぞ言ってくれたと掲句を見つけたときに思った。

……題詠「信」……

新茶どうぞと信用されているらしい 高知 ひーちゃん

初めての面会、または重要な商談、交渉など、作者は緊張した趣で訪問先を訪れる。しばらくすると、新茶なんです、どうぞ、と、お茶が運ばれてきた。新茶の香り、そして色。まだ、用件について、ひとことも発していないこの私を信用してくれている、その充足感の中で思わず呟いた一句。

秀作

蹴轆轤に田植疲れを癒しけり 秋田 藤井 洋舩
 月山の脇腹蹴つて夏スキー 東京 高橋きよ子
 月あかり骨壺そつと出してみる 滋賀 山下 翠紗
 夏蝶の移り気を見る花時計 愛知 神谷 鋭子
 雲の峰仮説立てては崩しては 山形 武田 道子
 藁みごで括れる出羽の新豆腐 東京 朝田 黒冬
 金魚にもいじめありしか槽の中 千葉 中込喜代子
 夏至の日の入相といふ別れかな 神奈川 小塚 信江
 塵芥光に変へて苔の花 東京 関 美奈子
 晩学のごそりごそりと長き夜 大分 後藤 史子
 てまがえも語り種なり田植果つ 山形 板坂 歩牛
 麦秋や二夫に仕へし母のこと 神奈川 荒木 久子
 還暦や茜冴えゆく月の山 山形 浅野 友美
 使はれぬ豆皿小皿星月夜 東京 山下 直
 奥の細道灼きつく昨日の影二つ 東京 植田 雅夫
 喜雨の中ぬぐふや顔の土ほこり 宮城 吉田 博子
 あつまつて勉強ごつこ夏休み 山形 伊藤 寛
 焼いて煮て揚げて三食初なすび 愛知 片岡 嘉幸
 綿菅や行者返しの塾 長野 大野今朝子
 古里のどかんと届くさくらんぼ 東京 大場 康裕
 ……題詠「信」……

それぞれにそれぞれの荷の遍路かな 千葉 森 謙一
 信頼の日本製品茄子の花 神奈川 細谷水無子
 夏の夜の着信音や時差越えて 福岡 鍋屋 立子
 子どもらに混りて写経堂涼し 岐阜 和田 郁江
 信仰のはじめは畏れやませ吹く 茨城 根本菜穂子

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

運動会校長坊主頭かな	相沢正志斎	噴水のまはりが濡れて子が遊ぶ	井上 幹彦	逆光は写真の技か夏の夕	岡田 哲郎
十二月八日茶房にピカソの絵	麻生 勝行	昭和まだ蚩袋の中にあり	井上由美子	鳶青葉覆う茶房に夢二の絵	岡本ひろえ
石仏の背丈を越して春女苑	荒井 千枝	カーネーション母の曲がった指のつめ	井原 文江	名を決めて産声を待つ月涼し	奥村 利夫
教室に一匹の亀夏休み	荒井ハルエ	夏場所のテレビの音を高くする	今井 哲也	流燈会終へて渚に波の音	奥村真由美
竹煮草雨したたかに鉄路錆ぶ	粟田口節子	手をつなぎくぐる茅の輪の香りかな	岩井 青岳	竹林をひらりすりぬけ夏の蝶	奥山 則子
百の面闇に見えくる恋かはづ	安在 宗風	火葬炉の金属音の身に入みて	岩城眞理子	涼しさや母の遠忌の若き僧	尾崎千代一
透く翅にひかり満たして赤蜻蛉	飯野 武仁	月山を望み盃干す菊日和	岩佐 昌武	飛び散るや波のかたちの夜光虫	小野 薫
草餅や失敗談に事欠かず	飯野 定子	朝顔をほめて一日始まりぬ	岩本 弘	春帽子旅ままならぬ齢かな	折田 芳子
一人には広き縁側星月夜	五十嵐千恵	修験者の霧より現れて霧に消ゆ	岩谷 塵外	年酒酌む親指の似て声の似て	垣内 薫
白狐神四方の残雪睥睨す	五十嵐良一	波立ちて空掃く如く花檉	上田 雅子	妹逝けり泰山木の白々と	鹿見嶋栄子
白南風や拍子木強き紙芝居	石田 慶子	降参をしてより打たる水鉄砲	植田美由紀	緑蔭や野点の席の江戸切子	春日 良江
出羽三山錦秋の水汲みにけり	石戸 幸子	糸練りの名残の蔵や雪明り	宇野みさ子	大げさに風に逆らふ合歡の花	加藤 清美
銀漢や子供三人授かりて	石原 良彦	草清水あつめて青き流れかな	及川 永心	ドラムソロの間にベーススト汗を拭き	加藤 申女
田植果て棚田一枚づつのきら	板坂 歩牛	ぐい呑みのゆがみを褒めて新走	大川 千草	山小屋の窓につがひの星鳥	金谷ゆかり
月山は靄の中なりイワカガミ	板坂 歩牛	残雪を噛むアイゼンと吐く息と	大島 幸男	からからと絵馬打ち鳴らし寒波くる	金子 絹子
山伏と護摩火を渡る星月夜	伊藤 厚子	桜薬ふる亡き人の年かぞへ	太田 喜子	古代蓮被災の村に咲かせたる	金子つとむ
田植機のみごと狭きを旋回す	伊藤 孝一	南無阿弥陀仏法輪の木下闇	大沼 遊山	山好きの赤い帽子や青葉騒	狩野 花朶
イザベルとトムと呼び合ふ浴衣かな	伊藤 石英	首ふれば軋む昭和の扇風機	岡 白雲	一切を手揉に込める新茶かな	亀澤 邦男
天空に城ありと聞く草茂る	伊藤 津良	青芝や手足伸ばして無重力	岡 まゆみ	野球場裏八重咲きの額の花	鴨井 清
青鳶やクロワッサンの量り売り	伊藤 哲	病室が特等席や揚花火	岡田 邦男	木も石も仏になつて月朧	神谷たくみ

夕風やワインは白と決めてをり	川上 虚承	聴聞の翁の腰の団扇かな	齊藤 邦枝	腕力も弱り大根おろすなり	芝田 太
月山の風もやわらぎさくらんぼ	川村 幸子	今日生きて木の芽と同じ空気吸ひ	齋藤 幸子	ロボットのごとき店員梅雨のカフェ	渋谷きみ子
添える箸は津軽馬鹿塗り豆御飯	川村 俱子	糞虫の危ふき糸の番手かな	斉藤正太郎	みしみしときしむ廊下や卒業す	島津 義浩
笛の音に暮れゆく空や薪能	木嶋 政治	雲海の宿より眺む濃き淡き	斉藤 節子	余生なほ孫に夏服縫ふゆとり	志村 芳子
いなつるびぐいと月山引き寄せる	木下 明	花は葉に空き教室のまたひとつ	齋藤 善太	仕舞ひには芭蕉談義や芋煮会	城山 憲三
溪沿ひの拜所のとぼし岩燕	木村 慶子	滴りを手にうけつつの一休み	坂井 正巳	夜行バス降りて月山草紅葉	榛葉 華子
どくだみの花差してある喫茶店	木村 典子	繡線菊や風を弾ませ隙間なし	坂本むつ子	一輪のどくだみにある気品かな	菅原 孝子
雛まつりマンハッタンの空青し	楠 暢太	鬼房も兜太も浄土雲の峰	櫻井アエコ	裏山の闇へ響かせ薪能	杉木 美加
つばめの子今夜は豪雨警報ぞ	久保登志子	有明や我が影ふみて田水張る	佐佐木 豊	ロケ隊の女優に翳す日傘かな	杉山三枝子
岩肌を流るる滝の光りけり	久保田敏子	老い入れの気もそぞろなり里祭	貞住 昌彦	混ぜ役を買つて出る兎や豆御飯	鈴木 計廣
相づちは父のやさしさ古団扇	蔵 堯子	ひと日ひと日色を重ねて山毛櫻芽吹く	佐藤いぐ子	天空に厄日知らす雲奔る	鈴木 木香
春愁の女が揺らす守り鈴	蔵 堯子	月山の見える脚立やさくらんぼ	佐藤しげ子	待つことも追ふこともなし夏椿	鈴木 正子
蟪蛄の腰の引けたる構へかな	桑高 喜秋	香水のほのか米寿の元教師	佐藤 昭治	鉄砲を持つは女よ菊人形	鈴木 正子
野焼き跡ふみて葬列細き畔	小杜 芳野	南無南無と渉る断層大雪溪	佐藤 隆	竜胆をしるべに巡る弥陀ヶ原	鈴木 雅子
大仏の背中が淋し蟬時雨	児玉 君子	涼風を浴びたくてまた橋の上	佐藤 敏文	みんなと鳴かれ埋もれ木柩めく	須田亜希子
月山を仰ぐ暮らしや豊の秋	きむらあきの	月山も鳥海も見え春隣	佐藤 豊光	半夏生野良着二つを吊る軒端	角 達朗
前足をつっこみミルク飲む子猫	後藤 明美	炎天の見えぬて遠きポストかな	佐藤 正博	先を行く人影消えて蝮蛇草	諏訪美和子
粽結ふ紐の片方きつく噛み	後藤 貞義	頂上の祠小さし霧襖	佐藤 美保	満開の木瓜の盆栽堀の上	関屋 筆生
サングラス掛けて異国の人になる	金 民子	露草のつゆのこぼるる坂のぼる	澤田 れい	鶴の子の葉の上駆ける速さかな	高崎 雅明
見えぬ目に雁渡らせてをりにけり	近藤 英明	ひっそりとマリア観音緑さす	塩野 恒子	噴水やうなずき歩くはぐれ鳩	高田 貞子
高嶺より霧流れ落つ月山路	今野 尚爾	停留所マフラーにみる個性かな	繁定 操陽	月山の裾の拡がり青りんご	高橋 和義
老いてなほテニス素振りや今朝の秋	今野 吉見	村御輿幼馴染の声のする籬	信子	郭公の声直線に通る里	高橋多美子

蔓からむ葉蔭で太る胡瓜かな	高橋 睦子	あちこちの実梅戴き梅仕事	土屋 通子	渡す手も触れて夏めく紙コップ	額田 昌安
かなかなや茅葺き屋根の神社	高橋 裕子	天女来て摘んで行きさう合歡の花	常盤 幸子	午睡する老いのしあわせ南無阿弥陀	根本 國男
夕映えの月山仰ぎ草を刈る	高畑 半身	山笑ふ帰路も月山見ゆる席	寅屋 照夫	王のごとく執事のごとく墓	根本菜穂子
出羽清水ふはり絹漉し豆腐かな	瀧川實樹男	八寸に月山筍の出羽路かな	直井 照男	湧水のひねもす砂を踊らせり	能田 孝昌
行く道の踏み跡標す雪明り	滝沢 寿雄	メモ帳を花の名で埋め峰涼し	永井かずほ	袈裟かけて添ふ六月の花嫁に	箱林 允子
月山の氏子総出の夏行かな	田口 穂心	玉こんにやく食うて紅葉の立石寺	中沖 正之	友訪ふを延ばしのばしや草もみぢ	波多野富代子
月山の山塊黒く十三夜	武井 猛	格子戸の町家巡りて鱧茶漬	中沖 稔	夏スキー五体の若さ解き放ち	畠腹 亨
出迎への鸚鵡と会話梅雨の宿	竹下 正子	来光に緑きらめく露の牧	中込 儀一	月山の平らなるかな孟蘭盆会	林 博史
海の日ひかり集めて雑魚筵	武田志摩子	雪かぶりもっこり白き浮寝鳥	中島 啓介	結氷湖芥の縁より緩みけり	原 美知子
松籟のはろけし出羽の木の芽づれ	田中 阿以	烏賊干の簀子百丈風の昼	長瀬 遊頭	春の風衣一枚の重さかな	原 美知子
老いと言ふ尊き日々を濃紫陽花	田中 隆	緋寒桜紅もて野戦病院跡	永田 圭子	かなかなや即身仏の村閑か	原田 耕雲
霧晴れてひとみの如き池塘かな	田中哲山人	仏足の拓本の軸揺れて梅雨	永田 満男	梅雨めくやなだりの草の直立す	坂西 直弘
夜神楽や衣をかへて面かへて	田中テル子	在りし日の会話をなぞる心太	永塚 尚代	岩風呂に夕あかりして苔の花	馬場 弘子
のうぜんの色裏返す路地の風	田中 俊	花菖蒲愛する歩幅となりけり	中根 武郎	葉桜や体はみでる背番号	馬場 弘子
葎脇まんまる穴のけもの道	田邊 明	ほうたるのまにまに灯る大樹かな	中宮 章子	月山の稜線虹の弧となりぬ	樋口 昇る
切りもなく竹落葉降る詣で道	田辺 国和	積めるだけ積みて戻りぬ昆布舟	中本きみよ	大寺の小暗き厨夜の秋	志鎌恵美子
すきとほる黍魚子の色湖の色	田辺美起枝	願掛の置石つなぐ蜘蛛の糸	中山 幸子	梅雨寒や峡の底ひに牛が啼く	福井 英敏
島宿に一夜託せし籠枕	谷口 豊	研修生母国を語る涼しき日	成瀬 貢	持て余す夏至の夕日のてらを	藤沼 公子
沙羅の花自死したる子の幼な顔	田村久美子	白壁を巡る水辺の川蜻蛉	名和 則子	流星に乗つて霊界パトロール	藤根 豊
志津の湯や月山ビール飲み交はし	丹野 貴夫	鶯や石階いよよ本宮へ	西住三恵子	二代目が囀売る鮎の宿	藤野 尚之
旅の夜の湯宿に啜る走り蕎麦	千田真理子	遠雷に腕組を解く老庭師	二藤 覺	母校いま老人施設十三夜	藤林 正則
病む人の呼吸整ふ梅雨晴間	塚田 風子	雨垂れの格子拭いてパー一祭	額田 昌安	菊花展作りし人の姿なし	藤原 正男

浄めつつ客待つ坊の山開き 藤本 昭子

隣村と水の繋がる天の川 細野やすい

敗戦のスコア消し去る白雨かな 前 九疑

盆の母ふろしきに紐足して結ぶ 増田 信雄

蔓架組む色とりどりの夏野菜 松尾 雄司

青すすき旗が合図の利根渡船 松岡 孝子

青芝に座り地球に乗る心地 松田 紀子

踏青のひとりにあまる光かな 松村 耕人

好きな曲流れて来たるソーダ水 三浦 貞葉

秋の声影深くして瑠璃光寺 三浦 美苗

青葉木菟ないてるねとテレビ消す 三重野憲治

糶の熾覆ふ阿闍梨の夏炬かな 三澤 俊子

みちのくの奥におくあり夏落葉 溝測 淑

橋一ツ二ツ渡りし花筏 三原 利子

風涼し仙人沢の橋に佇ち 宮岡 章子

指先に心をこめてさくらんぼ 宮山 輝文

ただちや豆食みてや陸奥の夏料理 宮山 輝文

行き行きて畑一面の紅の花 村井 一之

離村者の仮装に囃す盆踊 村田 浩

消息を確かめあひぬ施餓鬼寺 村橋 克雄

七夕の星に逢はむと小海線 百瀬さやか

暁闇の色とどめたる漬茄子 百田登起枝

残雪の薬草風呂や小屋の夜 諸星 泰子

ひたひたと鵜舟を打つや月の影 安田 清子

あれそれの会話も黙す良夜なり 矢野 郁江

山伏の一夜の宿り星月夜 ひでやん

水槽が世界の果てや金魚舞ふ 山崎 和久

名月を源にして弥陀ヶ原 山下 守

とうもろこしきれいに焼いて半分こ 山田 夏子

閉校の校歌や窓の斑雪 山中 節子

六十里越老鷲の声頻りなる 山本 碩一

義仲寺を出で立夏の風をまとふ 山本 浩

ままこ坂滝音神の声ときく 山本 実枝

月山の雲見て決める田草取り 湯浅 康右

幣帛の新米香る合祭殿 結城トミ子

垣越えて漂ふ匂ひ金銀花 横超 有正

近道は意外に遠し雲の峰 吉田 武夫

吉野山静かに余花の終りけり 吉原 誠之

祖谷溪の昏き岨道余花の冷え 吉本隆太郎

月山に水笛のごと囀れり 米倉 信山

桜桃の種つらつらと見る子かな 米山 節子

谷川に沿うて石楠花紅ほのか 若林 正人

歓声の先の先まで禅庭花 渡辺 禎子

……………題詠「信」……………

法話とてなけば信ずる良夜かな 朝川 晴也

通信簿手渡し夏が動き出す 有澤 嘉晃

心信親と辞書くる梅雨の最中哉 有田 徹雄

信長忌とばかりに鳥けたたまし 安在 宗風

網信じ身を万緑へダイビング 石塚 信子

登山帽脱いで信徒の貌となる 板坂 歩牛

信頼は胸中にあり蟬の殻 井塚 紫香

月山の水の育む花野かな 井上 昌子

菜の花や寺を守りて子と二人 今津ねむ女

児の名前しるせる風の高さかな 大石 知子

笈して神の山より雪解水 大川 千草

お花畑にて山頂の神拝む 大久保文夫

大試験父は無言で送り出す 川崎 和子

月山の霧霽れてゆく詣で道 川村 五子

遠月山足腰信じ稲架を組む 菊地みさ子

信ずれば待つよりなくて芥子坊主 北村 薫

長き長き妻との月日ソーダ水 木原 登

三山に詣での茅輪くぐりけり 工藤ひろし

不信心なれど祠の落葉掃く 久保 厚夫

月山の雪解を待つ信者かな 久保田敏子

自然保護発信山の風涼し 小柴 智子

梅雨明けの予報信じて月山行	小西 國夫	雪女信じし頃の外廁	中島 みつ	秋の雨信士信女の夫婦かな	ひでやん
雁渡し旅信にぼんとロシア文字	小宮 和代	返信は忘れたころに麦の秋	永田 若菜	百座目の月山信仰梅雨夕焼	山口 繭
爽やかや通学前の巫女の舞	坂口 智弘	桐一葉足湯にひたる信者たち	中村美智子	向日葵の孤高の一花ひらきけり	山田 凍崖
月山の神の加護かな滴れり	崎谷 弘子	結願をかなへ自祝の温め酒	西山 勝男	信楽の揃ひの壺に新茶かな	山本 浩
信頼の眼真つ直ぐ初稽古	佐藤育久子	新緑や銀行員の黒靴	波多野富代子	峰雲や信者の鳴らす杖の鈴	湯浅 康右
復旧を信じ合掌冬隣	佐保田明子	ある筈の余命信じて子猫飼う	濱田真知子	錫杖を登山杖とし目指す嶺	由良 清流
銀漢や少年老いて信を問ふ	白男川孝仁	回覧板路地の祠の草むしり	林 達夫	佳信届きし春風にさきがけて	吉原 誠之
信念の韋駄天走り雲の峰	杉山 峻一	つばくらや庫裡に園児の園児服	原田 咲子	弓持ちて信玄袋文化の日	若狭 菊英
大年や兄の遺作のほとけ拭く	高木ヤエ子	天動説信じてみたい流れ星	久田 正己		
信仰や神に仏にかたつむり	高田 英子	長靴を借りて信濃や水芭蕉	平井小枝子		
重信忌暑きに籠り息を吐く	高塚 早苗	先を行く白装束や雲の峰	深谷 泰子		
月山の依代となる花野かな	武田志摩子	鮫岩魚いつもいつしよの水槽に	藤本 修		
さはやかや水浸みわたる岩供養	帯刀 春男	未開封なる信書あり土用干し	船津 信子		
背信を責め立てるごと蟬時雨	田中 俊	水口に御札たておく青田かな	堀野カヅ子		
万緑の中の祠を信じけり	田村 利宣	舞妓持つ信玄袋秋うらら	松木 溪子		
月山の登山癒しぬ五色沼	丹野 宏美	しづかなる信仰に山眠りけり	三玉 一郎		
山の神山の仏に秋の風	茶谷 一花	何の金か仕舞い忘れの夏の夜	三原 利子		
山からの涼気陣屋に満ちており	土屋 通子	やまつみの信者の集ふ涼新た	宮山 輝文		
胸厚き行者の弾く滝飛沫	富田 洋子	信念の色は紫杜若	村上 秀吾		
月山を拝し始動の稲刈り機	霧野萬地郎	阿弥陀吐く空也に逢うて迎鐘	村田 浩		
白木槿もう返信の書けぬ母	永井かずほ	今朝一輪高嶺に香る朴の花	森近利宇子		
天界を信じたき日や遠砧	長島 環	信長に蘭丸弥助夏暁	森 哲州		

星野 高士 選

特選

月山や金剛杖に秋の風 山形 笹原 茂

地名の入った俳句は幾らでもあるが、それが単なる日記ではなく、俳句として昇華しているかどうかが分れ目である。「月山や」というこれ以上ない地名の響きは他にも沢山あるが、その作品が立句として動かないかどうかが次の判断でもある。金剛杖の重みと秋風の軽みとが同居して格調のあるものになった。

梟のこんな身近なところにも 岐阜 石原 サキ

十七音でどう詠むか、どう読手に伝えるのかはなかなか難しく結論はない。しかしながら、どこかを省略することによって余韻が生まれることも味わいのひとつ。この作品は下五の後に生まれそうな言葉をうまく省いて読手側を楽しませてくれた。気付くということをさりげなく伝えてくれた。

……題詠「信」……

登山帽脱いで信徒の貌となる 山形 板坂 歩牛

出羽三山は神や仏と融合している場所としても高名。しかしながら、どれも登るのは大変な事であり、登山帽が役立つ。夏帽ではこの句は成立しない。登山帽でその力や汗まで見えてくるからだ。もっとも出羽三山に限らずこういった光景はある。信徒の貌と表現したことによって有難い一句となった。

秀作

積めるだけ積み戻りぬ昆布舟 愛知 中本きみよ
 月山を望み盃干す菊日和 愛知 岩佐 昌武
 飛入りの撥の捌きや盆踊 秋田 田口 穂心
 蹴轆轤に田植疲れを癒しけり 秋田 藤井 洋舫
 花筵百七歳も加はりて 京都 野村 瑠以
 秋晴やもう健脚と言ひ難し 静岡 飯野 定子
 雲水の二百の列へ赤とんぼ 兵庫 佐保田全弘
 鳥宿に一夜託せし籠枕 岡山 谷口 豊
 廃坑や群れて出迎ふ蚊喰鳥 山形 清野 幸夫
 海峽のうすむらさきに夏の果 宮城 小松 温美
 朝霧の利根の水面はよく眠る 千葉 渡邊 竹庵
 錫杖の巖打つひびき夏の月 宮城 齋藤 伸光
 月山の山菜料理月涼し 三重 杉山 峻一
 門川の水つつばしる芋水車 愛知 波多野富代子
 奥部屋の風やはらかく午睡かな 大分 菊地 孝也
 船縁の傷のあきらか雁渡しし 北海道 宮坪 勝美
 月山の雲見て決める田草取り 千葉 湯浅 康石
 ほととぎす奥羽山脈から聞こゆ 埼玉 千葉アツ子
 一人酒いつもの席の金魚鉢 埼玉 埼玉 鳴滝 暁
 氷水あと一口に咳き込めり 和歌山 上ノ山陽子
 ……題詠「信」……
 滝壺の信者は滝に打たるまま 岡山 石井 淳
 男二人信号を待つ西日中 兵庫 西川 明美
 信州の歩みゆるやか更衣 長野 岡村 光博
 声明の信徒に和すや墓 山形 阿部小夜子
 信頼の梅干一つ握り飯 長崎 三矢 泰彦

佳作 掲載は氏名五十音順です。

独り居の庭に泰山木の花	渥美 英雄	山霧が池塘を走る弥陀ヶ原	猪股とみを	山内の句碑に寄り添ふ四葩かな	小川美津子
月山の筍飯や坊泊り	阿部清流子	山寺のひと間に雑魚寝明易し	上村 佳与	朝顔の羽化するごとく開きたり	奥村 利夫
月山の峰より湧きし群蜻蛉	安部 衣世	夕立や駆け込む人に軒雫	内山 忠	飛び散るや波のかたちの夜光虫	小野 薫
月山に双手を合はす春の宿	荒井 千枝	いにしえの古道を駆ける青葉風	宇野 弘人	出航の汽笛の届く蜜柑山	垣内 重行
月山の千年木立蟬しぐれ	荒木 幸子	難しきことは解りぬ蝸牛	梅田 松子	初蟬を聞く翌日の雨催ひ	柿谷 有史
八月や面影と声彼方から	有江 則雄	アスファルト歩けば空に時鳥	榎戸 源茂	山際の木の間にとつと合歓の花	片山 輝峰
土砂降りのシャッター街や額の花	有澤 嘉晃	流鏑馬の二の矢三の矢風薫る	大石 金雄	キーンさんの独語独断梅雨深し	渡良瀬一歩
竹煮草雨したたかに鉄路錆ぶ	栗田口節子	ぐい呑みのゆがみを褒めて新走	大川 千草	滴りの鬱然とある寺の奥	金山 道玄
葉をたたむ技の巧みや落し文	飯岡 敬子	梅雨じめり体の螺子の錆び初むる	大川 宣子	霾ぐもり睫毛にのこる出走馬	神根 信
透く翅にひかり満たして赤蜻蛉	飯野 武仁	いまもつて熱きものあり曼珠沙華	大坂 和子	伊予よりの月山まうで雷はげし	上村扶佐子
時を止め時を走らせ水馬	池上 吟	古い二人割烹に待つ鯉づくし	大成 金吾	一切を手揉に込める新茶かな	亀澤 邦男
五月富士見せて一日暮れにけり	池谷 鹿次	南無阿弥陀仏法輪の木下闇	大沼 遊山	梅雨空を押し上げてゆく山の風	亀山 公一
声だけが先に届きし濃霧かな	池田 純子	月山の蝶蝨にひと夜魘されし	大野今朝子	木も石も仏になつて月朧	神谷たくみ
此の先は獣道かも蕨摘む	池田タマキ	古里のどかんと届くさくらんぼ	大場 康裕	ひと呼吸おいて仰ぎし遠青嶺	川口 茂則
野球部はみんな丸刈り鯨雲	石原 良彦	春暁の湯街に残る川明かり	大平 政弘	轉も濤のみ空に訝する	河口 凡夫
田植果て棚田一枚づつのきら	板坂 歩牛	初蛩見つけときめく我が心	大村 幸子	寺町を黒き猫ゆく薄暑かな	川崎 和啓
月山の風はいつしか青田風	伊藤 啓泉	拍手と神鈴ひびく木下闇	岡 白雲	碧天に触れて崩れし雲の峰	川村 幸子
鉄棒の着地びたりと夏に入る	伊藤 竹代	早死の家系に生きて夏の蝶	小柏 久男	梅雨涼し遠まなざしの芭蕉像	岸 さなえ
大空に雲も出て来ぬ暑さかな	伊藤 忠	郭公や礼儀正しき男の子	岡田 明子	撫子や盛り土だけの遊女墓	岸下 庄二
噴水のまはり濡れて子が遊ぶ	井上 幹彦	太陽にすべてを見せて裸かな	岡田 春人	笛の音に暮れゆく空や薪能	木嶋 政治

食前も食後も葉木の芽時	岸本眞智子	月山を指す船頭の夏帽子	小林 恕水	民宿の五右衛門風呂や冬銀河	佐藤 正博
足音を聞き分けてゐる蟻地獄	木下 涼薫	空梅雨や如雨露片手に天仰ぐ	小林ヤス子	炎天の見えぬて遠きポストかな	佐藤 正博
夏草や力ゆるめず鬩ぎ合ふ	木下 藤香	梅雨はげし塔中煙る瑠璃光寺	小松 弘佳	頂上の祠小さし霧襖	佐藤 美保
いくたびも潜りて鳩の探すもの	木下 藤香	三線の響き消しをる猫の恋	米須 盛祐	自販機の横の細道穴まどひ	実沢 愛子
噴水の水豊かなる月山湖	工藤ひろし	残雪の原生林に息吹あり	小森 良彦	見はるかす多摩の流れや麦の秋	佐野 通夫
鮎釣や糸をたぐりて行く深み	工藤 昭和	告白の返事は問はず月見草	小山 愛子	奥入瀬の辿り着きたる滝の音	座間 英幸
最上川まで歩をのばし秋深む	熊谷 貢	修験者の言霊風に青田波	金 民子	迷ひこむ路地の涼風ふところに	重富美津恵
相づちは父のやさしさ古団扇	蔵 堯子	稲架掛や夕闇山を転げくる	近藤 好廣	三山や出羽をいろどる稲の秋	志村 美好
夏薊牧舎に風のやはらかし	蔵 堯子	月山の星またたけり田螺鳴く	今野 忠雄	紫陽花の藍に力を貫ひけり	庄司 和子
最上川ふくるる日々や山桜	栗山よし子	法螺貝の木霊となりて峰の月	權守いくを	みちのくの木霊の響く星涼し	菅原 榮子
蟪蛄の腰の引けたる構へかな	桑高 喜秋	木洩れ日を揺らす湖畔の秋の風	齋藤キミ子	ロケ隊の女優に翳す日傘かな	杉山三枝子
祭笛聞きつつ急ぐ厨事	源通ゆきみ	耳慣れぬ鳥の声する梅雨湿り	齋藤 真人	月山を傾けて飲む岩清水	鈴木登喜和
箱舟の傾ぎを深く蓴採る	幸野 峰	昼顔や雨戸の開かぬままの家	斉藤 光男	奥山の駅に人無し月見草	鈴木 木香
月天心万象音を潜めけり	小沢 芳治	滴りや法螺貝響く湯殿山	酒井 憲子	梅雨籠り遊びの種も尽きにけり	鈴木 正子
名水の育てし郷の稲を刈る	こづかあきこ	鬼房も兜太も浄土雲の峰	櫻井アエコ	羽黒嶺の闇切り裂きてほととぎす	鈴木 睦子
粽結ふ紐の片方きつく噛み	後藤 貞義	霊峰の地に降り立ちし螢かな	桜井 正男	離農する心耳に未だ田水沸く	須田亜希子
金賞は日々丹精の菊薫る	後藤 松溪	子燕や空の広さを確かめり	貞住 昌彦	神前に向かふ二人に若葉風	砂押 悦子
人の名のすぐに出てこぬ端居かな	後藤 史子	宿坊の蕨の蒼を愛でにけり	佐藤いく子	地球とは宇宙の隅の金魚玉	砂山 恵子
縦走の風の誘ふ岩清水	後藤 良一	菜種梅雨音なく濡らす海難碑	佐藤さき子	半夏生野良着二つを吊る軒端	角 達朗
一振りの鍬に落花を惜しみけり	五ノ井研朗	声明の低き響や雲の峰	斉藤 隆夫	溪昏れて闇深みゆく遠河鹿	角 雅行
百円を缶に落してトマト買ふ	木幡 嘉子	涼風を浴びたくてまた橋の上	佐藤 敏文	あんパンに餡と空洞梅雨最中	関 美奈子
大陸の大河の果てへ天の川	小林香代子	春寒し巫女宿坊の朝掃除	佐藤 豊光	月山に拾ひし神の落し文	高田 英子

噴水やうなずき歩くはぐれ鳩	高田 貞子	遠富士や野に初蝶の息生まる	露木 伸作	久々の生家の墓所や竹落葉	西本美弥子
日めくりは昨日の日付種物屋	高田みづ紀	白南風や越後三山雲二つ	戸田 敬身	野良仕事声なき一と日汗を拭く	二藤 覺
月山の脇腹蹴って夏スキ	高橋きよ子	廃屋の庭離れざる秋の蝶	外村 吉淳	雨の香に先駆け低く夏燕	額田 昌安
月山の白雲迅し青胡桃	高橋 進	緑蔭を重ねて山の深さかな	中井 静子	滝壺を出て新しき水となり	能田 孝昌
郭公の声直線に通る里	高橋多美子	格子戸の町家巡りて鯉茶漬	中沖 稔	殉教の島黒々と五月雨るる	萩原 豊彦
月山や社殿目指して霧の径	高橋美智子	月山に夕べのひかり遅ざくら	中川 湖洲	黒鯛の良く釣れる日よまた釣れる	畠腹 亨
月山を映して今朝の青田かな	田口 穂心	子子の埃のごとく浮き沈み	中澤 安子	夏来たるトランペットの音光る	原 清香
月山の氏子総出の夏行かな	田口 穂心	烏賊干の簀子百丈風の昼	長瀬 遊頭	若者の水買つてゆく花の昼	原田 咲子
月山もずしりと暮れて秋の雨	武井 猛	無住寺の薨を渉る梅雨満月	永田 満男	凧の夜は父の文母の文	原田 咲子
窓に沿う夏蝶の影われひとり	武川 文枝	稽古積み自信のもてる祭笛	永谷 芳子	単線のホーム短き青田風	馬場 弘子
男らの朝の煙らふ菓喰	竹田しのぶ	手を合はす小さき祠や木下閣	中根 武郎	黒南風や白くたぎれる日向灘	久永のり尾
ひさかたの出羽の訛や胡瓜揉み	帯刀 春男	段高き望楼の間や夏の潮	中宮 章子	大寺の小暗き厨夜の秋	志鎌恵美子
初蝶の淡き風まで重かりき	田中 公子	月山の稜線はるか夏の月	中村 穹子	四阿の不動の吾を閑古鳥	平林 佳治
山歩き昼飯あとの三尺寝	田中 教仁	甲斐武田見据えし城や臥竜梅	中村 敬	梅雨寒や峡の底ひに牛が啼く	福井 英敏
夜神楽の一夜氏子となりゐたり	田中テル子	新米の入荷を告げて御用聞き	中村 智善	みちのくの山の向こうに星流る	福山三智子
半夏雨防災食を食べてをり	田中 洋子	野薊の驟雨に彩の増しにけり	中山 幸子	座に満ちる風のうれしき薄暑かな	藤枝 信雄
旅なかば朝顔市をひやかしぬ	種元弘一郎	願掛の置石つなぐ蜘蛛の糸	中山 幸子	平家谷の吊橋わたり夏深し	藤田 克弘
子燕の餌を受け取る早さかな	田村サキ子	天仰ぎ地塘に沈む雨蛙	新原 健	田植機の往路復路や嫁見張る	藤墳 博明
旅の夜の湯宿に啜る走り蕎麦	千田真理子	万緑に沈まんとして山ホテル	西住三恵子	二代目が囃鮎売る鮎の宿	藤野 尚之
納経の墨痕清し著莪の花	千葉アツ子	駄菓子屋の隅に息づく浮人形	西村 久子	能登島に春灯一つ又一つ	渕野 栄子
水喧嘩動ぜず妻の頼もしさ	千葉 三郎	まっ青な地球を信じ鳥渡る	西村 礼子	ひぐらしや月山へ歩を移すべく	不破 元之
三山に餅かへるや時鳥	千原 道子	伊吹より秋の風来る蛤塚忌	西本 文子	炎天をふたつに分ける飛行雲	保坂 嘉郷

再会 は あっけら かん と 氷水	細野 や すい	引き 売りの 声 青年 の 日 焼 け 顔	森	靖子	万 緑 に お ぼ れ 露 天 湯 あ ふ れ し む	渡 辺 倫 子
梅 雨 明 け や 免 許 返 納 決 断 す	細 谷 水 無 子	滝 壺 の 無 垢 と こ し な へ 水 煙	森	要 子	小 流 れ に 沿 う て 踊 り 子 草 な び く	綿 引 多 美 子
月 冴 え て 四 阿 の 影 真 つ 四 角	保 積 和 人	月 山 や 錫 杖 急 か す 法 師 蟬	森 井 初 枝	……… 題 詠 「 信 」 ……	………	………
羽 黒 山 五 重 塔 や 蟬 し ぐ れ	堀 榮	繩 文 の 心 享 く と や 虫 時 雨	森 哲 州	信 心 の 補 陀 落 渡 海 青 嵐	あ ま の 樹 懶	
逍 遙 の 径 の つ れ づ れ 梅 雨 の 蝶	大 木 宙	ひ た ひ た と 鷓 舟 を 打 つ や 月 の 影	安 田 清 子	信 頼 の 出 来 る 友 あ り 夕 端 居	荒 木 幸 子	
令 和 に も 昭 和 の 梅 を 挽 ぎ に け り	松 浦 美 智 子	青 梅 雨 や 建 具 替 へ た る 京 町 家	柳 内 恵 子	信 仰 と 言 へ る も の な し 鳥 雲 に	飯 野 定 子	
化 粧 し て 花 菜 明 り に 道 祖 神	松 下 乃 湖	湯 の 宿 に 雨 を 聴 き み て 処 暑 の 声	矢 野 郁 江	信 州 の 友 へ 土 産 の 目 刺 か な	池 之 上 輝 夫	
踏 青 の ひ と り に あ ま る 光 か な	松 村 耕 人	山 伏 の 一 夜 の 宿 り 星 月 夜	ひ で や ん	月 涼 し 即 身 仏 の 論 す 信	板 坂 歩 牛	
花 の 駅 特 急 電 車 徐 行 し て	丸 山 与 作	河 骨 や 山 気 下 り く る 羽 黒 山	山 崎 千 鶴 子	経 典 に 信 の 字 探 す 夜 長 か な	板 津 松 男	
好 き な 曲 流 れ て 来 た る ソ ー ダ 水	三 浦 貞 葉	リ ラ 冷 え や 生 活 の 中 の 電 子 音	山 田 千 恵 子	朴 の 花 湯 殿 古 道 の 信 仰 碑	伊 藤 厚 子	
水 打 ち て 宵 に 元 気 を つ な ぎ け り	三 浦 一 志	修 験 者 の 太 き 地 声 や 天 高 し	山 田 凍 崖	裏 切 れ ぬ 信 用 二 日 よ り 仕 事	伊 藤 絃 美	
秋 の 声 影 深 く し て 瑠 璃 光 寺	三 浦 美 苗	涼 し さ や 寄 せ て は 返 す 波 の 音	山 本 キ ョ 子	信 頼 を 集 め て 甘 し さ く ら ん ぼ	稲 畑 介 廣	
ひ と つ 落 ち ふ た つ 落 ち し て 柿 の 花	右 田 捷 明	逡 巡 を 楽 し ん で ゐ る か た つ む り	山 本 則 男	鈴 な り の 南 信 濃 の 星 月 夜	今 井 理 務	
人 も み な 殺 生 で 生 く 蟻 地 獄	三 澤 俊 子	桐 咲 い て 風 や は ら か き 奥 会 津	山 本 久 枝	信 ず れ ば こ そ 尺 蠖 の 一 途 な り	太 田 正 之	
み ち の く の 奥 に お く あ り 夏 落 葉	溝 渕 淑	灯 籠 に 余 生 を 託 し 流 し け り	横 江 恵 三	残 雪 や 信 濃 の 里 の 湯 の 煙	大 平 政 弘	
薬 売 り 新 米 二 合 提 げ て 来 し	宮 崎 尚 範	羅 の 着 こ な し 上 手 茶 を た て る	吉 居 珪 子	誠 よ り 信 は 生 ま る る 瓜 の 花	岡 田 明 子	
六 道 の 辻 へ 消 え た る 白 日 傘	村 田 浩	み ち の く の 海 よ り 上 が る 秋 の 虹	吉 井 た く み	旗 高 く 信 号 渡 る 夏 帽 子	岡 野 弘 子	
消 息 を 確 か め あ ひ め 施 餓 鬼 寺	村 橋 克 雄	万 緑 や 想 ひ 出 も ま た 隙 間 な し	吉 田 公 子	信 仰 の 息 と と の へ る 夏 座 敷	小 川 美 津 子	
ぼ つ ね ん と 灯 る 湯 宿 や 秋 深 し	持 田 市 朗	近 道 は 意 外 に 遠 し 雲 の 峰	吉 田 武 夫	法 螺 の 音 や 信 者 の 踏 め る 雪 溪 路	小 野 誠 一	
七 夕 の 星 に 逢 は む と 小 海 線	百 瀬 さ や か	座 敷 に は 午 後 の 日 を 透 く 秋 簾	和 田 郁 江	信 州 へ 嫁 し て 八 十 路 や 松 の 花	春 日 良 江	
土 用 鰻 卒 寿 の 命 さ ら に 延 ぶ	森 定 子	一 人 居 の 手 を 抜 く 昼 餉 冷 奴	和 田 勝 子	信 じ を り 母 の 遣 り 方 梅 を 干 す	加 藤 清 美	
手 動 よ り 自 動 の ド ア や 夏 来 る	森 静 子	空 蟬 や 名 も な き 草 に 縋 り 付 き	渡 辺 一 甫	全 山 に 信 仰 の 風 夏 の 朝	金 谷 ゆ か り	

信仰の療法もあり五月病	金子日出子	信心の心根集め盆供養	高橋 輝子	信念の色は紫杜若	村上 秀吾
先頭の足跡信じ蟻の列	木下 涼薫	信楽の皿に窯変喜雨の中	田上 喜和	今もなほ信長の寺銀木犀	村田 寛文
月山の月を信じて願ふこと	吾 亦紅	信心の母をまぶたに孟蘭盆会	田中テル子	自信作てふ白桃を求めけり	村橋 克雄
信徒ゆく湯殿山にも秋の声	倉本 尚彦	背信を責め立てるとと蟬時雨	田中 俊	秋近し風索索と信天翁	柳内 恵子
煤払ふ信徒に配る焼きむすび	栗山よし子	朝夕の信心篤く生身魂	田畑 茂代	信心と畏れ連れをり夏祭	柳澤 友香
雪解水海へ海へと信濃川	小久保以久	信濃路の闇夜を見せし蚩かな	月城 花風	卒業子くり返し見る通信簿	山野 節子
菩提寺に睡蓮咲くも不信心	小平 貞	年酒酌む信義の厚き友とこそ	鶴田 幸男	風信子水栽培の鉢に咲く	山本 碩一
山開き信仰深き行者道	兎玉 胡餅	端居して信じたきことただ一つ	中澤 安子	綿虫の明日を信じてとんでゆく	行藤
長き夜の信頼よせる師の法話	きむらあきの	返信は忘れたころに麦の秋	永田 若菜	神官の二礼直角村祭	湯田 畊道
白靴の行く信仰の山を雨	小林 靖子	信濃路はどこかに泉道祖神	永田 満男	信濃立つ百名山の秋気かな	吉村 喜子
雁渡し旅信にぼんとロシア文字	小宮 和代	信濃路や撫林道の風薫る	秀 遊		
信仰の息づく茂り四方の山	齋藤 真人	我信じ我を確かむ月の山	萩原 昇風		
秋の蝶己を信じすこし浮く	齋藤 仲光	信仰の島の天草落椿	濱田 朋子		
万緑に鎮もる靈気羽黒山	櫻井アエコ	老鶯に睡り破られ信濃宿	平賀絃太郎		
農継ぐと決めた子信じ田を植える	佐藤 昭治	夏休大らかに子を信じ切る	深澤美佐恵		
銀漢や少年老いて信を問ふ	白男川孝仁	地藏会の信心ひとつ鶴を折る	藤田美和子		
返信の婚の受諾や風薫る	菅谷 貞夫	月山に深く一礼帰省の子	藤林 正則		
信濃路の一人吟行西鶴忌	鈴木 武	未開封なる信書あり土用干し	船津 信子		
信心の形代はふり湯殿山	鈴木 睦子	梅雨の月信じたきこと僅かあり	古畑富美江		
春浅き辺野古の海へ信を問う	砂川 節子	信あれば徳ありと言ふ三尺寝	前 九疑		
春疾風ゆさゆさ揺れる信号機	瀬端 忠男	羽拔鶏自信過剰の面構へ	宮岡 弘		
信仰や神に仏にかたつむり	高田 英子	信仰の出羽山深く霧深く	宮川 雅子		

宮坂 静生 選

特選

登るほどひれ伏す青葉青葉冷 岩手 阿部 靖

高山は登るほど気圧が下がり、風雨にもさらされ山草も木々の葉も「ひれ伏す」状態となる。真夏も青葉冷が著しい。ひれ伏すのは信仰のためではなく、自然条件のきびしさから。ふだん気付いていても、そこに诗情があるとは思わなかった月山の様子を捉え、珍しい一句。巧い。

月山を仰ぎて実る稲穂かな 兵庫 大上 修美

穫り入れの秋を迎える。山は月山。暮しの中にも月山がある。田植から収穫まで一切、月山に見られながら。麓の者にとり月山を仰ぐことが生きる力。ああ今日も月山の機嫌がいい。田の稲穂はお山月山の霊力によって実をつける。平凡と言えは平凡。しかしこれが暮しというもの。

……題詠「信」……

信心の一打一打や鉦叩 大分 後藤 史子

私の信仰心が鉦叩に浸透した一句。鉦叩が信心深いように表現されているが、私が鉦叩の一打一打をありがたや・ありがたやと仏のさとしのように受けとったもの。南無阿彌陀南無阿彌陀と聞こえるのである。かぼそい声の虫であるが、規則正しい虫の音は聞く人の心を浄化するようだ。

秀作

今日生きて木の芽と同じ空気吸ひ
水打てばいつとき消ゆる蟻の列
腕力も弱り大根おろすなり
噴水に置きし小さき疲れかな
秋晴やもう健脚と言ひ難し
まつ青な地球を信じ鳥渡る
来世また生まれかはりて踊りたし
月山の風吹き下ろす涼夜かな
月天心万象音を潜めけり
夏草や力ゆるめず闊ぎ合ふ
少年に返り闊歩の大夏野
蚤掴みすぐ口の中で潰す母
蹴轆轤に田植疲れを癒しけり
灯籠の一つ一つに降る夜霧
摩天楼焦がしゆきたる大夕焼け
杏熟れのちにいろいろありぬべし
鯉職下ろすときだけ庭狭し
草笛吹いていつぱしのちんどん屋
月山に咆哮一つ牧開き
来光に緑きらめく露の牧

山形 齋藤 幸子
長崎 川村 一重
岐阜 芝田 太
神奈川 藤枝 信雄
静岡 飯野 定子
三重 西村 禮子
東京 若林 正人
群馬 山口 雄二
愛知 小沢 芳治
群馬 木下 藤香
東京 野村 雅子
大阪 馬場 進
秋田 藤井 洋舫
千葉 湯浅 康石
千葉 栗山美津子
岐阜 伊藤 恵水
静岡 高塚 早苗
東京 田辺 秋花
山形 須藤 敏子
山梨 中込 儀一

秋近し風索索と信天翁
戦なき国と信じて泥鱈汁
天と地の交信として滴りぬ
猫の仔の聞耳立てて信貴の山
信濃路のかそけき音も白露の夜

神奈川 柳内 恵子
静岡 佐野 明美
新潟 織田亮太郎
北海道 西井 健治
東京 山口 楓子

……題詠「信」……

佳作

掲載は氏名五十音順です。

跳躍のししむら越ゆる夏の山	四十物文代	鉄棒の着地びたりと夏に入る	伊藤 竹代	山若葉帽子が好きで旅がすき	大槻かずゑ
唐辛子青の時代もあつたはず	赤繁 忠弘	月山の雲の上行く遍路かな	伊藤 忠男	綿菅や行者返し of 的	大野今朝子
妣を待つ蛍袋に灯をともし	赤繁 忠弘	三山に滴っている今がある	伊藤 津良	春暁の湯街に残る川明かり	大平 政弘
赤翡翠神棲む森に声伸ばす	安次富邦子	月山の眩しきままや冬夕焼	井上多桂子	青信号渡る初蝶ゴッホの黄	岡崎 達栗
月山の筍飯や坊泊り	阿部清流子	一夜明けつゆ晴かくも美しき	井上 敏子	月山に四つん這いして蕨狩り	岡崎 陽子
川隈の中州のあたり上り鮎	阿部 柗太	奥山は雲に紛るる青山河	井上 幹彦	秋の雲この広さゆえこの悲しみ	田岡 晃正
月山を被ふ茂りの翡翠色	阿部美和子	才子の真夜の動きを知りたくて	今井 理務	神祀る青嶺谷音なお青し	岡野 弘子
落ちる葉の音聞きたくてひとりゐる	天田あすなう	なにげなく暦めくれり終戦日	今井 哲也	麻袋手に蛇取りの破顔かな	岡林 稲甫
梅雨冷やごきぶり隅を逃げ迷ふ	荒井 古鷹	遠雷の微かに天と地のあわひ	岩測 純子	稲妻の出羽三山を奔りけり	小川 邦昭
教室に一匹の亀夏休み	荒井ハルエ	朝顔をほめて一日始まりぬ	岩本 弘	玉葱の吊されてる坊主めき	小川美津子
麦秋や二夫に仕へし母のこと	荒木 久子	修験者の霧より現れて霧に消ゆ	岩谷 塵外	春潮や島に昭和のシネマ館	沖 純次
微臭き戻る我家や地震の後	有田 徹雄	いつの間に雀隠れの厨口	植田美由紀	夕焼にこの頃白い鴉見し	奥田千香子
万緑や大涌谷は硫黄噴き	池谷 鹿次	山寺のひと間に雑魚寝明易し	上村 佳与	炎天の嶺八方に桃熟るる	小口 静江
宇宙基地島一泊の良夜かな	池之上輝夫	渾身の代打宵闇に一閃	遠藤 玲奈	朝顔の羽化するごとく開きたり	奥村 利夫
さくらんぼ太陽の子を口に入れ	石川 卓	月山の水掛けて終ふ種卸	及川奈奈夫	腰痛やぴんと張りたる蜘蛛の糸	奥村 芳弘
あの時の麦藁帽子児の遺品	板坂 歩牛	秋耕や月山けふは機嫌よし	大泉 峰子	月山にしんと月出て出羽照らす	奥山 功
水色の移動図書館天高し	市丸万由美	月山の水の恵みのさくらんぼ	大久保文夫	月読の山や新たな登山靴	尾崎千代一
点滴に心落ちつく扇風機	井塚 紫香	出来秋や莞然として月の山	大塩 春治	彦星の渡る一步や雨あがる	尾崎 久子
あつまつて勉強ごっこ夏休み	伊藤 寛	発心の背を押す風や野水仙	太田 喜子	飛び散るや波のかたちの夜光虫	小野 薫
田植機のみごと狭きを旋回す	伊藤 孝一	水中花適齡期とはいくつまで	大塚とも子	現世に在さぬ人よ鳥雲に	折田 芳子

春帽子旅ままならぬ齡かな	折田 芳子	神々の静かな目覚め蘖る	桑原 淑子	月山のはんざき躰る地塘かな	佐藤 隆
朧夜のほのかな灯播磨灘	垣内 重行	著我の花人におもねること知らず	合田マサル	月山も鳥海も見え春隣	佐藤 豊光
噴丘の大きな空の大夏野	柏木ともみ	極上の山の持て成し夏炬焚く	小柴 智子	仰向けに雲の流れを見て泳ぐ	佐藤風信子
魁夷逝く五月の森の白馬かな	春日 良江	夏至の日の入相といふ別れかな	小塚 信江	炎天の見えるて遠きポストかな	佐藤 正博
山小屋の窓につがひの星鳥	金谷ゆかり	向日葵を一心不乱に画く子好き	後藤 松溪	一生は東の間蒨蕪芋を掘る	佐野 月子
滴りの鬱然とある寺の奥	金山 道玄	晩学のごそりごそりと長き夜	後藤 史子	ひっそりとマリア観音緑さす	塩野 恒子
凍鶴のとうに気配は消しにけり	釜谷 徹男	しげさやんまの羽化を待ちみたり	後藤 良一	海開き大きく見える父の胸	繁定 操陽
木も石も仏になつて月朧	神谷たくみ	月山を指す船頭の夏帽子	小林 恕水	みしみしときしむ廊下や卒業す	島津 義浩
水分のおん神囃す河鹿笛	川合 清	炎天を断つ月山の金剛杖	小松 憲征	月山や太極拳に草の花	清水 勝子
それはもう顔の涼しき赤子かな	川浦 克彦	百年の煤纏ふ梁冬近し	小室けい子	木の実落つ水輪消したり鯉の水脈	志村 洋子
仰臥して空に息する捨案山子	川崎 和啓	星砂の浜の昼餉や日焼の子	米須 盛祐	星飛ぶや島に一つの礼拝堂	白男川孝仁
百足打つ一人ぐらしの底ぢから	河村 葉子	秋草や古きひらかな文字が好き	近藤 英明	裏山の闇へ響かせ薪能	杉木 美加
動きつつ動かざるごと蝸牛	菊地 孝也	丹波太郎今も少年兵の兄	近藤 好廣	杖ついて月山尾根を登りけり	鈴木 健一
いくたびも潜りて鳩の探すもの	木下 藤香	月山の星またたけり田螺鳴く	今野 忠雄	一瞬の集中力や海鷗捕り	鈴木 武
月山の池塘を渡る春の雲	木原 登	河骨や地塘の中を明るくし	今野 典子	梅雨籠り遊びの種も尽きにけり	鈴木 正子
四十度北海道の夏の口	草分 蠢爾	お寺へと嬰抱くやうに今年米	齊藤 邦枝	見切り石に躓く日傘畳みけり	鈴木 周子
雛まつりマンハッタンの空青し	楠 暢太	純真な子の手にとまる赤とんぼ	齊藤 昶	夏空や色鉛筆は風を描く	鈴木 実
月山を斜めに這ひて稚児車	熊沢れい子	青芒風の行方を教へけり	坂口 和代	赤翡翠追ひかけて来し南谷	鈴木 睦子
迫りくる青嶺を抜けて佐久平	倉持 南美	繡線菊や風を弾ませ隙間なし	坂本むつ子	トランポリン宙返りして夏来る	鈴木わかば
夏スキー万年雪を削りけり	栗原ただし	登り終え月山仰ぐけだるさよ	佐々木トワ	若夏や水平線の溶けるなり	砂川 節子
月山のおく見ゆる日や水落す	栗山よし子	竹皮を脱いで誰より伸びにけり	佐竹 高子	天の川何処かに居そう宇宙人	砂川 隆
蝸螂の腰の引けたる構へかな	桑高 喜秋	葱坊主少年並べてすつ飛びゆく	佐藤育久子	地球とは宇宙の隅の金魚玉	砂山 恵子

おぼる夜や今に生きたれば迷ひなし	諏訪美和子	高高き荷を負うてゆく草の市	千原 道子	青空に溶けてしまひし桐の花	中畑 耕一
どしゃぶりの白詰草のけむりたり	関 雅巳	咳払ひして通りけり水鉄砲	塚本 治彦	セザンヌの林檎転がる夜の卓	中村 頌子
向日葵の仰ぎみやるは月の山	関口 昌弘	あちこちの実梅戴き梅仕事	土屋 通子	夏の日を返し一山白みけり	中山 幸子
鶴の子の葉の上駆ける速さかな	高崎 雅明	月山や月のひかりに杉の秀	露木 伸作	黒揚羽忙しく花芯移りけり	中山 幸子
月山に拾ひし神の落し文	高田 英子	月山を円弧に括る夏の鶯	鶴田 幸男	薫風のほのかに香る潮かな	中山 幸子
月山やさむぎむ螢灯を灯す	高梨 裕	山百合の群を抜く白森冥し	寺川 芙由	思い出はよきことばかり桜咲く	中山 武子
反り強き雪代山女最上川	高橋きよ子	子供の日バリカン刈りの青あおし	富樫 桂子	新樹光指で確かむ赤子の齒	名越 紫音
緑蔭に語り未来を大きくす	高橋 俊彦	蹲にもぐる沢蟹山の朝	富樫 幹朗	雲水の脚絆に着きしつづれさせ	西川 明美
不意をつくおこじよ目の前雪の嵩	田口 穂心	蝮退治遠巻の女祈るかな	徳田しずよ	万緑に沈まんとして山ホテル	西住三恵子
月山の山塊黒く十三夜	武井 猛	冷奴昭和に有りしものに恥	永井かずほ	青岬一氣にくずる砂の城	西村 久子
晩夏光死生並びて来つるかな	竹内さと子	緑蔭を重ねて山の深さかな	中井 静子	負けた子の背をあふぎやる団扇かな	西村 英雄
黒姫山を想ひながらの緑かな	竹内 恒男	じゃがいもの花は五角や五稜郭	中沖 正之	七月や白き生足急ぐ街	額田 昌安
海の日のひかり集めて雑魚筵	武田志摩子	日盛や火の見やぐらの影失せて	中沖 稔	幻の森を見ている春の象	根本菜穂子
流れ来て霧の遮るケルンかな	田嶋由美子	月山に夕べのひかり遅ざくら	中川 湖洲	ぼうたんの散るにためらひなかりけり	野中 憲子
月山に受ける夕焼日本海	帯刀 春男	山守や滴る山へ分け入れり	中澤 草子	月山の夜や秋声に寛げり	信澤智恵子
夜神楽の一夜氏子となりるたり	田中テル子	子子の埃のごとく浮き沈み	中澤 安子	殉教の島黒々と五月雨るる	萩原 豊彦
一丸となりし蹄や梅雨の牧	田辺 秋花	夕立雲天に暗幕張るごとし	中島 啓介	野辺山の巨大アンテナ夏来る	橋爪 洋子
初曾我にめでたき日とて泣きにけり	谷口 豊	滝しぶき風に託して消えにけり	中島 保	青梅雨や一息つける洗濯機	羽矢 真人
三山の良く見え竹は皮を脱ぐ	田畑 茂代	烏賊干の簀子百丈風の昼	長瀬 遊頭	月山のぶな根開きて鼓動きく	早坂 芳子
独り居の自由と孤独心太	田宮美和子	花菖蒲愛ずる歩幅となりにけり	中根 武郎	春の風衣一枚の重さかな	原 美知子
秋の虹灰かに山の透きとほり	田村 華生	螢火やいよいよ遠くなる昭和	中根 武郎	干薇むしろ引き摺る山長者	原田 耕雲
一瀑の音を頼りに山の秋	千原 道子	旻天のお経木霊の納骨堂	永野 春子	蛇衣を脱ぎて浸るや最上川	樋口 昇

満願の笈のかるさや萩の声	眩元 燈穂	山始め 柘は正装 跣足袋	宮崎 尚範	万緑や想ひ出もまた隙間なし	吉田 公子
大寺の小暗き 厨夜の秋	志鎌惠美子	サルビアよ草の中にて燃えつくせ	宮澤千枝子	月山も均しく梅雨入いたしけり	吉田 武夫
かなかなや日暮催促してゐたり	平林 佳治	雪溪を越えて湯桶の音高し	椋本 望生	月山に水笛のごと囀れり	米倉 信山
獅子舞のまばゆき顔を上げにけり	福島 政勝	売られゆく赤べこの声秋の声	椋本 望生	ちんぐるま能登のをみななの匂ひ立つ	若林 正人
蟪蛄の脚や雲梯渡ること	藤田 博子	紫陽花の毬結ひ終へて結願す	村上 克哉	道産子の豊かな臂や夏来る	若林 正人
十六夜の月につまづく蛙かな	藤田美和子	松の芯たつた一人の子と生れぬ	村田 淑子	月山を削るが如く大夕立	渡部 巖
木偶廻し出羽にもありし秋の宿	渕野 栄子	ひぐらしや防空壕に逃れし日	村橋 克雄	綿菅も山頂仰ぐ弥陀ヶ原	渡邊 直子
独り居に光まむかふ菊日和	船越 春代	七夕の星に逢はむと小海線	百瀬 さやか	草笛や幼心の風に乗り	渡辺 洋子
滴りに朽ちゆく塔や羽黒山	古畑富美江	虫ピンを刺せぬ弟夏休	百瀬 ゆみ	荒梅雨や白衣観音前屈み	綿引多美子
水漬ややたら遺体に触れたがり	不破 元之	暁闇の色とどめたる漬茄子	百田登起枝	……………題詠「信」……………	
ききみみの頭巾もらひて月夜かな	前島 康樹	いち日の残り傍に髪洗ふ	森 祐司	月山は総て信心黄菅かな	青山 君代
滝行者滝の化身となり白し	増田 信雄	縄文の心享くとや虫時雨	森 哲州	緑蔭に鷹を信ずる飼育かな	赤峰ひろし
早苗田のそよぎて夕日沈みけり	松尾 雄司	梅雨の星残して月の遁走す	屋代 義男	法話とてなかば信ずる良夜かな	朝川 晴也
被災地の瓦礫の未だ梅雨明けず	松岡 孝子	鬼百合や里の日暮れはまったなし	安富 榮	万緑や信心深き母なりき	荒井 古鷹
行き先は御伽の国か柳絮飛ぶ	松岡たけを	断捨離を徐々に身ほとり涼しうす	柳 良子	信頼の出来る友あり夕端居	荒木 幸子
紙漉きの呼吸を合はす涼しさよ	松木 溪子	山祇の吐き出したまふ天の川	ひでやん	信長忌とばかりに鳥けたたまし	安在 宗風
月山のこよなく晴るる帰雁かな	松村 耕人	村歌舞伎虫へ棧敷を返しけり	山上 博美	信仰と言へるものなし鳥雲に	飯野 定子
海市よと旅人に貸す望遠鏡	丸山 与作	すかんぼや折れば子供に戻りたり	山口 勝	春一日信ずる友は磁石ごと	井川 肇子
夏草や屍ありそな草の丈	萬年 和子	月あかり骨壺そつと出してみる	山下 翠紗	信頼は胸中にあり蟬の殻	井塚 紫香
粃の熾覆ふ阿闍梨の夏炬かな	三澤 俊子	逡巡を楽しんでゐるかたつむり	山本 則男	月山の風に息づく風信子	稲葉 京閑
出羽三山囓みて音するもの旨し	溝淵 淑	桐咲いて風やはらかき奥会津	山本 久枝	かの夏や信濃で見たり未完の画	岩崎 幸邦
浮かぬ子を浮かすまじなひ海開き	三矢 泰彦	みちのくの海より上がる秋の虹	吉井たくみ	忽然と鯖大群の魚信あり	岩本 弘

お花畑にて山頂の神拜む	大久保文夫	信濃川うだる暑さを流しけり	重富美津恵	夏休大らかに子を信じ切る	深澤美佐恵
信仰の出羽三山に秋が来る	奥山 功	信州の箱より香るりんごかな	高橋 睦子	月山に深く一礼帰省の子	藤林 正則
若葉光亡き友在るを信じけり	折田 芳子	鎖場を攀づる信者や夏木立	高橋 利之	信じるの信じないのと蚯蚓鳴く	安野たかし
信じをり母の遣り方梅を干す	加藤 清美	信楽の皿に窯変喜雨の中	田上 喜和	梅雨の月信じたきこと僅かあり	古畑富美江
滴りや月山信仰あるがまま	北島 孝子	信濃路やあわてん坊の秋の雷	武井 猛	矢狭間から秋澄む信濃見つけた	保坂 嘉郷
烏賊の待つ海は風なり信天翁	工藤 晴美	信濃奔流雲太らせて日雷	田中 公子	信あれば徳ありと言ふ三尺寝	前 九疑
一心に信じる心向日葵よ	くにともしゅん	支柱あるを信じきつたる胡瓜の手	田中哲山人	月光や信太の森をよぎれる尾	前島 康樹
月山の雪解を待つ信者かな	久保田敏子	次の世を信じて夏の月山へ	丹野 貴夫	効くといふ言葉信じて土用灸	増田 信雄
雪嶺の月山下る修行僧	栗山よし子	信ずるといふ一念や露涼し	寺川 芙由	しづかなる信仰に山眠りけり	三玉 一郎
鬼手仏心信じてさわやか手術台	源通ゆきみ	月山を拜し始動の稲刈り機	霧野萬地郎	やまつみの信者の集ふ涼新た	宮山 輝文
薫風や明日を信じて今日を生き	小坂たま子	かの美女の落第をみな信じざり	中川 計介	ふらと来ていつしか秋の信天翁	椋本 望生
山開き信仰深き行者道	児玉 胡餅	天界を信じたき日や遠砧	長島 環	一信を机上のままに暑氣払	村上 克哉
きつと来る出番信じる余り苗	後藤 貞義	星空の明日を信じ梅を干す	中畑 耕一	信じ合ふ二人となりて菖蒲舟	矢内とき子
雁渡し旅信にぼんとロシア文字	小宮 和代	谷川や飾り付けたき今年竹	中村 孝行	蒼天を囲む信濃の青嶺かな	山岸 嘉春
信仰の修験の道に白瀑布	金 道博	桐一葉足湯にひたる信者たち	中村美智子	信心の泰山木の花白し	山本 則男
月山の神を祀りてさくらんぼ	近藤 英明	信仰のはじめは畏れやませ吹く	根本菜穂子	夏霞帰山の僧の消えゆけり	吉井美代子
羽黒なる信仰の山秋闌ける	今野 尚爾	我信じ我を確かむ月の山	萩原 昇風	青空を信じ白靴選びけり	米田 陽子
馬子唄の信濃追分登山口	齋藤 博	炎暑なか電信柱顔しかめ	橋爪ひさ子		
梅雨冷や風信帖を臨書せり	佐佐木 豊	信仰の島の天草落椿	濱田 朋子		
月山は信心湧きて風涼し	笹原 茂	産土の友の信書や栗の花	春山 武雄		
鯉こくも霧雨も濃き信濃かな	貞住 昌彦	実梅干しあまき匂ひを返信す	平井 幸大		
信濃路の油屋の夏未明かな	佐藤 敏文	月山の雲問ひ放くる冬安居	平地 俊雄		

NHK学園生涯学習フェスティバル
月山俳句大会
入選作品集

令和元年十月二十三日発行

編集発行 N H K 学 園

〒一八六一八〇〇一
東京都国立市富士見台一三六―二
電話〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。



あなたの学びを「本」にまとめてみませんか

日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習レポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)



開催日	開催地	会場
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

※相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接伺います。

下記の時間枠を設定、先着順ですでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃っていないでも大丈夫!まずはご相談ください。出版アドバイザーがていねいにご説明します。

お問合せ NHK学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

NHK学園 月山俳句大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「月山俳句大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,800 円

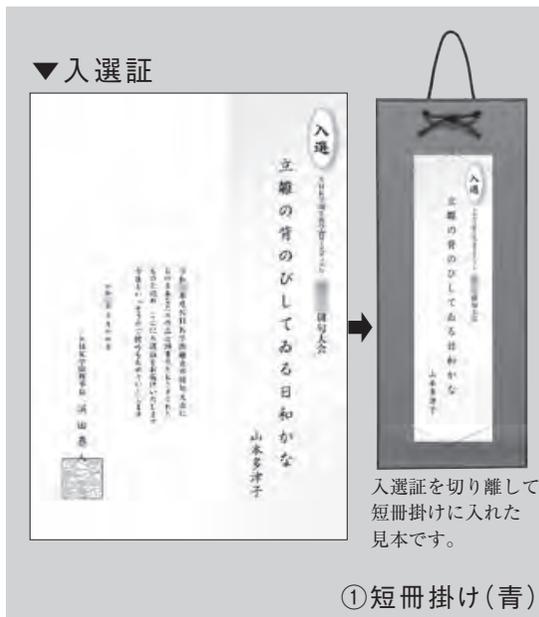
- * A4判 (297×80 ミリ) でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

《専用額》

- ①短冊掛け (青)
材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,700 円 (税・送料込)
- ②額 (クラシックゴールド)
上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,700 円 (税・送料込)

《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
1つ 14,000 円 (税・送料込)
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。



キ.....リ.....ト.....リ.....

令和元年度 NHK学園 月山俳句大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 -

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品 (全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①普通為替または定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。
 ※為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
 申込先・連絡先
 〒186-8001（住所記入不要）
 NHK学園教材サービス
 月山俳句大会入選証係
 TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
 封書のあて名に
 してください

<郵便振替の専用口座>

	口	座	記	号	番	号		
0	0	1	9	0	7	5	6	3 6 0 8
加入者名	NHK学園教材サービス							

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

為替専用

令和元年度 NHK学園月山俳句大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号							
住所	〒								
電話番号	-	-							

○入選証

掲載誌ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金額
				1,800円		
				1,800円		
				1,800円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ句を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。
 4枚以上希望される場合にはお手数ですがコピーをしてご記入ください。

○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,700円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,700円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

実作力アップコース

正しい文法を知る

俳句 文法のツボ

- 苦手意識を持つ方が多い「文法」。
このコースでは、文法の「ツボ」を効率よく学ぶことができます。句づくりに必要な文法に絞った俳句実作者のための学習内容です。
- リポート課題は3回。各リポートには作句課題がありますので、テキストで学んだ知識が実作で使えているか確認できます。

上級者のためのコース

俳句倶楽部

- 俳壇の第一線で活躍中の講師によるワンポイント・アドバイスと、会員同士の誌上句会を楽しむ、俳句上級者のためのコースです。大会や雑誌の投句で、より上位の賞を目指す方におすすめです。

ワンポイント・
アドバイスが
受けられます

ワンポイントアドバイス講師
(2019年5月)



井上康明
「郭公」



岩岡中正
「阿蘇」



片山由美子
「香雨」



小浜杜子男



高野ムツオ
「小熊座」



寺井谷子
「自鳴鐘」



西村和子
「知音」



三村純也
「山茶花」

- 受講期間1年（自動継続）
- リポート提出9回（ワンポイント・アドバイス投句5句×4回、誌上句会 投句2回、互選2回、コンクール1回）

教材

リポートセット
〈別送〉機関誌（4冊）
「誌上句会 投句集」・「誌上句会 作品集」（各2冊）

◆「俳句倶楽部」の特徴

リポート

- ・ワンポイント・アドバイスは全4回（1回につき、自由題5句提出）
 - ・あなたの提出作品に、俳壇で活躍中の著名な実力派俳人が一言アドバイス。
 - ・希望の講師を選べます。
- ※各講師には定員があります。一定数を超えた場合、ご希望の講師のアドバイスを受けられないことがあります。

誌上句会

- ・誌上で「句会」を楽しみます。
- ・会員の自選作品を掲載した作品一覧から2句選び（互選）、高得点の作品を作品集で発表します。

コンクール

- ・年1回のコンクールは「俳句倶楽部」会員同士で腕を競います。全投句作品が作品集に掲載されます。

有馬朗人、宇多喜代子、大串 章、
コンクール選者 黒田杏子、鷹羽狩行、深見けん二、
星野 椿、宮坂静生

講座の詳しい案内パンフレットを無料でお送りします。



0120-06-8881 FAX042-574-1006

フリーダイヤル

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2 NHK学園 6B05 係
ホームページ <https://www.n-gaku.jp/life>



2019年
10/1
開講



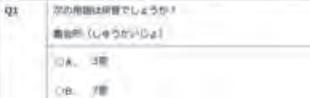
小島健 & 神野紗希の

ネット俳句講座

俳句づくりのポイントをNHK学園専任講師小島健さんと「俳句甲子園」出身の若手俳人 神野紗希さんがわかりやすく解説した「オリジナル講義動画」の視聴を中心に学習を進めます。

選択式のドリル課題でらくらく学習!

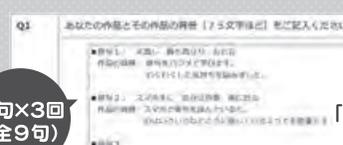
学習のスタートはドリル形式の課題。
「知識定着」のために(25問×2回)に取り組みます。



「ネット俳句」
キャラクター
ハジメさん

ネットですいすい作句レポート!

ドリル課題で要点を理解したら、俳句づくりに挑戦。
ネット経由で提出し、講師からのアドバイス(添削)をPDFファイルで受け取ります。



「ネット俳句」
ナビゲーター
パショウダ先生

全50問

ネットだから
すぐに成績がわかる!
※解説つき

紙の「テキスト」も
あわせて読んで
チャレンジ!

3句×3回
(全9句)

「俳句アイデア帖」を
参考にレッツ作句!

知らず知らずのうちに
俳句が上達しますよ!



オリジナル
講義動画
約40分

好きなタイミングで
学べるのが
いいですねー!

学習の進み具合も
楽しくチェック!

俳句の旅「おくのほそ道」



学習を進めていくと、ネット俳句のキャラクターハジメさんがどんどん「おくのほそ道」を進んでいきます。
ハジメさんと一緒に俳句の旅をはじめましょう!

学習おつかれさま!

各単元の最後に「パショウダ語録」

俳句の空型の魅力を学びましたね。世界最長の詩型です。その短さと広さを感じてください。



先生のナマの声は
心にしみます…!

パショウダ先生に扮した「俳壇の重鎮」宇多喜代子さん(NHK学園俳句講座アドバイザー)が、俳句のある人生について、みなさまに語りかけます。

全カリキュラムを
修了したら修了証書を
プレゼント!



講座の詳細

受講期間: 6か月

教材費・教材送料・指導料込み
受講料: 18,900円(税込)
いーはいく

今なら!

NHK学園HPにて無料体験受講できます。

詳しくは学園HPを
Check!!

NHK学園ネット俳句



<https://www.n-gaku.jp/life/course/4158>

スマホ
タブレットからは
こちら!▶



NHK学園

第3回誌上俳句大会

投句
締切

令和元年12月22日(日) 消印有効

発表

令和2年3月10日(火) 発行 入選作品集誌上にて

選者

(敬称略)



井越 芳子
(青山)



菊田 一平
(や・晨)



嶋田 麻紀
(麻)



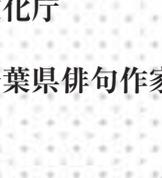
能村 研三
(沖)



原田 清正
(椽)



平手 ふじえ
(雪垣)



松尾 隆信
(松の花)

ご投句者全員に
入選作品集を
お送りします

【投句要領】

規定の用紙(コピー可)または大きさなど同形式でご投句ください。
ひとり何組でも、どなたでも応募できます。

◆自由題二句または自由題二句+題詠「道」二句。題詠「道」はテーマ詠。「道」の漢字が入らなくても結構です。題詠のみの応募はできません。

◆未発表の自作に限ります。二重投句は固くお断りいたします。

投句料

①自由題二句 二、〇〇〇円 ②自由題二句+題詠一句 二、八〇〇円

送金方法

◆郵便為替、現金書留、郵便払込※のいずれかをご利用ください。(切手の代用不可)

※郵便払込 郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投句料を記入してください。

口座番号 00190151336869

加入者名 NHK学園俳句大会事務局

賞・発表

◆大会大賞、俳人協会賞、選者特選・秀作・佳作など

発表は投句者全員にお送りする「入選作品集」で行います。

主催

NHK学園

共催

公益社団法人俳人協会

後援

文化庁

協力

千葉県俳句作家協会

(予定)

あなたの俳句を、全国の俳句仲間のみなさまと合同句集として1冊にまとめてみませんか。

小島 健先生・館野 豊先生 選句・鑑賞文

第30集 合同句集『くにたち』

～はじめてでも安心!～

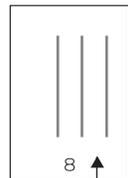
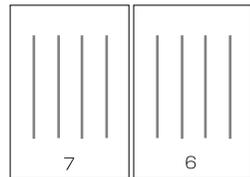
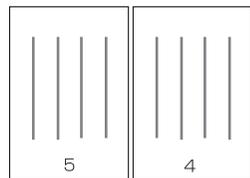
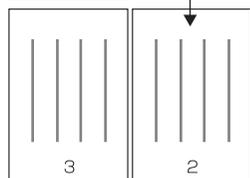
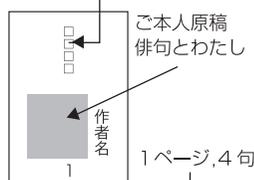
リポート・大会・スクーリングなどを通して、たくさんの作品がお手元におありのことでしょう。NHK学園俳句講座の小島健先生・館野豊先生が選句（一部添削を含む）。この中から1句の鑑賞文を配本時に別紙にてお付けいたします。また、ベテラン編集者がいねいに本づくりのお手伝いをさせていただきます。どうぞふるってご参加ください。お待ちしております。



装幀／菊地信義
発行／NHK学園



タイトル（題名）



最終ページ、3句

応募要項

募集締切 令和2年4月30日

発行 令和2年8月初旬（予定）

◆作品について

おひとり40句お送りください。

27句に選句し掲載します。

※鑑賞文は掲載せず、応募者個別に完成後別紙にてお渡しします。

参加応募用紙をお送りいたしますので、下記あてにご請求ください。

※すでに発表された作品でも結構です。

◆合同句集『くにたち』の仕様

サイズ：四六判（たて18.8×よこ12.8cm）

製本：上製本（ハードカバー）カバー付

お一人様：8ページ 1ページに4句掲載

◆参加費用 おひとり76,000円（全経費・税込）

- 掲載された合同句集『くにたち』第30集 20冊配本（追加の場合は1冊2,000円になります。）

参加応募用紙をお送りいたします。参加ご希望の方は下記へご請求ください。

教材サービス『くにたち』係 TEL 042-572-3151 (代)

NHK学園 〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 FAX 042-572-0061

すべては^{やま}月山の 雪がもたらした



月山志津の積雪5～6m(居住地日本一)



月山スキー場 日本一遅くまで滑走可能



月山湖大噴水 112m、噴射高日本一



山菜料理 一大食文化



寒河江川 清流日本一 (H7国交省)



大井沢の大栗
幹回り日本一(幹囲8.84m H8調査)

月山の雪はまず「生命の水」をもたらししました。
自然の偉大な浄化力と潤れることのない水。
水は巡り、あらゆるものを育みました。
ブナの森、湖、花々……もちろん人や動物たち。

そして、日本有数の豪雪は容易に人を寄せ付けず、神のおわす場所として出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)信仰の一大聖地となりました。江戸時代、「湯殿まで笠の波打つ大井沢」と詠われたほど行者・参拝者が押し寄せ、自然発生的に、山先達と呼ばれる案内人や宿坊が数多く出てきたのです。

地域を潤す「お行様(行者)」を精一杯もてなすために供した豊富な山菜もまた、山の恵み。月山に登るためのエネルギー源であり、不調を治す薬でもあった山菜は「おもてなしの工夫のDNA」で「山菜料理」として発展し、多くの方に「珍しい」「おいしい」と喜ばれています。

月山の雪は、日本ではここだけと言ってもよい「夏スキー」というスポーツの楽しみも私たちに与えてくれました。
さらに、ブナ林・フラワー・紅葉の各種トレッキングなど、健康の喜びが感じられる様々なアクティビティを展開しています。

清浄な水と空気、脳裏に焼きつけられる雄大な景色。身体中に染み渡る滋味溢れる食の数々……。
“いつもと違う” ゆったりと流れる時間を味わいに、いらしてみませんか。

月山朝日観光協会

〒990-0792 山形県西村山郡西川町大字海味510

TEL: 0237-74-4119 / FAX: 0237-74-2601

e-mail: k-kyokai@town.nihikawa.yamagata.jp